

— CLA-アーカイブズ 35

「学びの連携」プロジェクト公開セミナー
効果的な論文指導を目指して

— 日本語論文編 / 英語論文編 —

The Liberal Arts
The Liberal Arts

慶應義塾大学教養研究センター主催

「学びの連携」プロジェクト公開セミナー

効果的な論文指導を目指して

——日本語論文編／英語論文編——

目次

日本語論文編	3
英語論文編	25

「学びの連携」プロジェクト 2016年度公開セミナー 効果的な論文指導を目指して——日本語論文編

2016年10月27日（木） 18：15～20：00

会場：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎2階 中会議室

どのように論文を指導すべきか悩んでいませんか。

本ワークショップでは、論文を効果的に指導する方法を検討し、共有することを目的としています。

論文を指導するうえで大切なことは、論文特有の文章構造を理解することです。まず、論文の全体構造と各セクションに特有の文章構造があることを確認します。

次に、書き手が主体的に考える姿勢を促す指導方法を紹介します。

参加者の皆さんには文章指導で経験した苦労や失敗談などを紹介していただき、一緒に解決策を考えていきます。

書き手と指導者、書き手同士の双方向の〈対話〉によって、自立した書き手を育てる文章指導を目指しませんか。

講師

大野 真澄

慶應義塾大学法学部専任講師

司会

小菅 隼人

慶應義塾大学教養研究センター所長・理工学部教授

効果的な論文指導を目指して

——日本語論文編

小菅（司会） 皆さん、こんばんは。今日は、教養研究センターの「学びの連携」プロジェクトの「効果的な論文指導を目指して—日本語論文編—」ということで、大野真澄先生にリーダーをお願いしています。

大野先生には、教養研究センターで「研究の現場から」という学者交流サロンでお話いただいたときに、これは我々教員、あるいは意欲ある学生に大変参考になりそうだということで、お願いした次第です。

それでは、どうぞ今日はよろしく願いいたします。みなさん、生徒になったつもりで頑張りましょう。

大野 ご紹介にあずかりました、法学部の大野真澄と申します。皆さん、授業の後、もしくはお仕事の後ですよ。お集まりいただき、ありがとうございます。本日は、日本語論文の書き方について、皆さんと一緒に、普段抱えていらっしゃる疑問点やお悩みなどを共有して、できるだけたくさんの解決策を見いだしていこうというような趣旨でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

まず初めに、論文の書き方については、皆さんそもそものように教えたらいのかという共通の疑問があって、今日お越しいただいているかと思います。言い換えれば、論文を指導する必要があるのではないかということだと思いませんか。従来、論文は大学の制度では教えてこなかったというようなことだったかと思います。それは、もしかしたら母語なので、書いて当たり前なので

はないか。もしくは、論文を指導できるような方がいなかったのかというようなこともありますけれども。やっぱり何ごとも教えられずには、学生の方も書けませんので、そこは明示的に教えていく必要があるということは、共通理解かと思います。

今日は、2つ方法を示唆させていただきます。1つ目は、〈ジャンル〉に基づいた指導を行ってみたいかがどうかということですね。2つ目は、書き手を主体にした指導を行っていきましょうという、この2点について、お話をさせていただきます。

本日は、前半と後半に分かれておりまして、前半は講義形式です。講義と申しましても、私が一方的に話すというわけではなくて、ミニアクティビティーを用意しておりますので、ちょっとしたアクティビティーも踏まえて活動をしていきたいと思っています。



講義の内容ですが、まず、ジャンルについて具体的に説明をいたします。その後、ジャンル分析とはどういうものかということを紹介し、さらにジャンルに基づく文章指導とは何なのかということ。そして最後に、書き手主体というのはどういった指導方法なのかということ、扱っていきます。

この後、講義が終わりましたら、もしかしたら少し休憩を挟んで、ディスカッションに移っていきます。参加者の皆様、それぞれ所属が違っていたりとか、専門分野が違っているかと思しますので、自己紹介をしていただいて、その後で、お悩みや苦勞など、普段学生さんの前ではなかなか話せないようなことなどもあるかもしれません、そういったことも共有していただこうと思います。そして、解決策をできる限り共有していきましょう。

I、講義

〈ジャンル〉とは

まず重要な定義になりますが、ジャンルというのは、日本語でも聞いたことはあると思います。これは、皆様、私も含めてなんですが、日常的に使う、いわゆる音楽とか文学のジャンルとは、また少し定義が異なります。ジャンルというのは、ここでは、特定の目的を遂行するために構築される、ある程度、定型的な形式を伴う言語行使の類型 (Swales, 1990) ということですね。英語ですと「a class of communication events」と言われます。コミュニケーションのイベントだということです。そこがポイントになっていきます。

そして、このジャンルの概念ですが、様式ごとに分かれている単なる類型というわけではなくて、それに含まれるコミュニケーションの目的というのが非常に重要になっていきます。つまり、一つ一つのジャンルには異なるコミュニケーションの目的があると考えられます。また、それに伴って、構成、形式、読み手もしくは聞き手も異なっていきますので、ジャンルを取り巻く概念は非常に複雑になっております。

では、大学というコンテキストでよく扱われるのは、学術的なジャンル (academic genre) かと思います。例

えば、講義クラスで出されるレポートや書評、卒業論文、修士論文、博士論文、学術論文、研究計画書、あるいは実験の報告書など。これら一つ一つが個々のジャンルと位置付けられています。

コミュニケーションの目的が異なっていることにお気づきでしょうか。例えば書評でしたら、対象となる本の評価をするということが目的となります。例えば卒業論文でしたら、学士のレベルの学位を取るための論文、研究をまとめたものになります。

学術論文は今回メインに扱うものです。投稿論文とも言われます。こちらは一般的には研究者と言われる立場の方 (大学院生も含まれます) が学術雑誌に投稿する論文と考えられます。それぞれ個々のジャンルは、コミュニケーションの目的、構成、形式、読み手が異なっていくということですね。

では、ここで本日のターゲットになります学術論文について、詳しく見ていきたいと思っております (中谷, 2016, p.105)。私たちはよく論文というふうに言いますが、実際にはいくつかの種類に分かれているというふうにも考えられています。1つは、実証的研究論文、もしくは原著論文と言われるものです。これは、論文の中では最も頻繁に書かれるものでして、量としても圧倒的に多い種類のものになります。新しい課題を提示して、それについて実験や調査で検証していくというようなものです。

次がレビュー論文ですね。これは、当該分野における先行研究を批判的に概観し、課題を提示していくというものです。

そして次に、理論構築や方法論に特化した論文。これは、同じく先行研究を概観するんですけども、趣旨としては新しい理論を構築したり、もしくは、すでにある理論について改善点を提示する、もしくは研究の手法について、既存のものについて問題を提示したり、新しい手法を提示するというような方法があります。この3つが、学術論文に含まれる下位分類となります。

1つポイントになってくるのは、この実証的な研究論文なんですが、実はセクションに分かれていることです。この論文に含まれている、序論、結論といったそれぞれのセクションも、それぞれ異なる目的を持つ下位のジャ

ンルに位置付けられるというところが、ポイントになってきます。つまり、ジャンルというこの概念なんですけれども、上位概念と下位概念のように、いくつも構造的になっているところですね。1つの論文というジャンルを扱っていても、その中でセクションに分かれておりますので、個々のセクションも1つのジャンルとして認識されていくということになります。

では、なぜジャンルを意識することが大切なのでしょう。個々のジャンルには、特有のコミュニケーションの目的、構成、表現技法（レトリック）というものがあります。さらに読み手（聞き手）が異なっていきます。つまり、ジャンルを認識することによって、同じジャンルを扱う人々（discourse community）と、効果的に、かつ円滑にコミュニケーションを図ることができるという利点があります。このために、扱う個々のジャンルの特徴を、それぞれ書き方をしっかり理解しておくこと、さらには指導者の方も、指導をするにあたってしっかりと理解しておくことが大事になっていきます。

ジャンル分析

では、続いて、このジャンルを使った分析（genre analysis）について説明します。これは、そもそもは研究手法であったのですが、その目的は、個々のジャンルが持つ構成や表現技法（レトリック）を明らかにすることです。

この分析の方法ですが、アメリカの Swales という学者が、学術論文の序論（introduction）の構造特性を明らかにした（Swales, 1990, 2004）というところから、この手法が発達していきました。「Create a Research Space (CARS) モデル」と言われています。これは、学術論文やそのほかのさまざまな、特に学術的なジャンル、その構造特性を解明するために、今日でも広く扱われています。

皆さんは、学術論文を書いたり読んだりされていますけれども、論文の序論で何が大事なのかということ、Swales が提唱したように、「Research Space」をしっかりと確立することが大事なんです。つまり、自分のこの論文ではどんなリサーチのスペースがありますよ、ちょっと専門用語になりますが、ニッチがありますよと

Create a Research Space (CARS) model (拙訳)

ムーヴ 1 研究領域の確立

- ステップ 1 トピックの重要性を示す
- ステップ 2 トピックの背景情報を示す
- ステップ 3 先行研究を概観する

ムーヴ 2 ニッチの確立

- ステップ 1A 異議を唱える
- ステップ 1B 欠落を指摘する
- ステップ 1C 疑問を投じる
- ステップ 1D 伝統を継続する

ムーヴ 3 ニッチの履行

- ステップ 1A 本研究の目的を述べる
- ステップ 1B 本研究の概要を述べる
- ステップ 2 主な成果を述べる
- ステップ 3 論文構成を示す

いうことですね。具体的に、このモデルについては後ほど説明をしていきますけれども、序論の目的そのものが「Create a Research Space」ということで、しっかりと最初の段階で研究に値するニッチを確立した上で、論文を書き始めていくというような流れになっていきます。

このジャンル分析ですけれども、CARS モデルに含まれる2つのディスコースのユニットがありますので、ご紹介します。1つ目はムーヴ (move) と言われています。この意味としては「ディスコースにおける一貫したコミュニケーションの役割を遂行するための談話的または修辭的まとまり」となります。

そして、このムーヴの下位概念として、ステップ (step) というものがあります。これは、通称サブムーヴ (sub-move) とも言われ、個々のステップというのは、その上に来る上位概念である当該ムーヴに関連するコミュニケーションの目的を有しています。個々のステップが複数組み合わせることによって、ムーヴが確立されるということです。つまり、複数の個々の目的、コミュニケーションの目的が達成されることによって、上位のコミュニケーションの目的が遂行されるという認識になっています。

この Swales の CARS モデルには、このムーヴとステップという2つの異なるレベルでのユニットが登場してきます。

ムーヴ 1 は「研究領域の確立」です。つまり、どんな研究分野で、どんな研究のトピックを扱うのかということ、まず確立させましょうというのが、イントロダクションの出だしの部分になっていきます。この研究領域

を確立するためには、トピックの重要性を示す、もしくは研究トピックの背景情報を提示する、そして、先行研究を概観する、という3つをすべて行うか、もしくはいくつか行って、この研究領域の確立を目指すということです。

この領域がまず確立されたら、次にムーヴ2「ニッチの確立」です。その研究領域の中で、自分はこの論文の中で何を行うのかというニッチですね。先行研究の中で行われていなかったことを、明確にこちらで指摘していきます。

その方法としては4つありまして、まず、先行研究に対して異議を唱えるというわけですね。異議というのは、例えば研究結果についての異議かもしれませんが、研究の方法、手法そのものについての異議かもしれません。さまざまな事柄がありますけれども、何らかの異議を唱えることによって、研究を行う理由付けとして確立させます。

そして欠落を指摘するということですね。例えば何々の視点からの考察がされていないので、本研究ではその視点からの考察を試みる。もしくは、ある出来事について、アドバンテージ、利点については十分に議論されてきたが、問題点については議論されてこなかったというような、何らかの欠落を述べることによって、ニッチを確立するという方法があります。

もしくは疑問を投じる、ですね。これも同じように、研究の手法であったり結果について、何らかの疑問を投じる。

もしくは伝統を継続するというので、これまでやってきた流れをそのまま継承する形ですね。ある意味一番穏やかなニッチの確立の仕方になるかと思います。伝統というか既存の枠組みを使って、さらに発展させるという位置付けになっていきます。

ニッチをしっかりと確立した後に、ムーヴ3「ニッチの履行」、つまり本研究で行うことを述べていきます。具体的には、本研究の目的、もしくは概要を述べるということがあります。さらに、研究の主な成果を、イントロダクションである程度示してしまう。最後に論文の構成を示すという流れになっていきます。

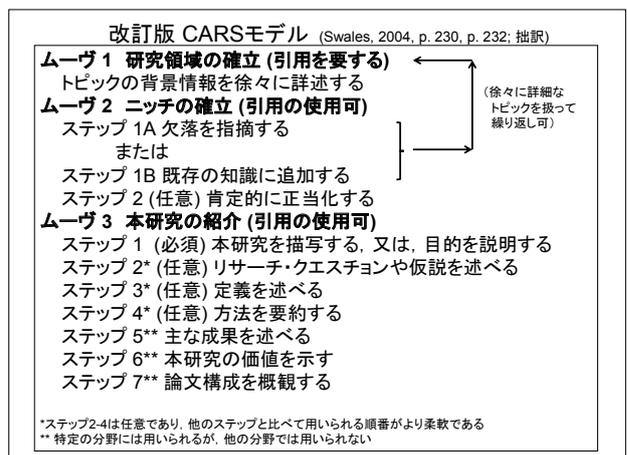
ところで、実はこれは1990年のモデルなんですね。

その後、もう10年、15年とたつにつれて、いろいろな分野で研究が進み、このモデルに改善が必要なのではないかというような見解が多々見られ、Swales自身が改訂版を提示しました。これが2004年のモデルになっていきます。ムーヴについては、3つのムーヴは同じです。最後のムーヴ3だけは、本研究の紹介というように組み直しておりますけれども、結局はムーヴ2、ニッチの確立を行った後に、本研究で行う内容を紹介するというので、ムーヴ自体の在り方は変わりません。

大きく変わったところとしては、ムーヴ1のところ、トピックの背景情報を徐々に詳述するというところで、例えばトピックの重要性を述べるとか、先行研究を概観するというのも、大まかにこの中に含まれてしまうというようなことでまとめています。

それから、分野によって必須のものと任意のものがあるということも、研究が進むにつれて分かってきています。例えば本研究の目的ですね。研究を描写する、もしくは目的を説明する。これは、どんな研究分野であっても、イントロダクションでは必ずしなければならない必須のステップになっています。一方で、ステップ2、3、4。リサーチ・クエスチョンや仮説を述べる、定義を述べる、方法を要約する。これらは任意となっております。

さらに、ある分野では成果を述べたり、研究の価値を示したり、論文の構成を示すというのが必須、またはよく用いられるけれども、ほかの分野ではそうとは限らないということで、分野ごとに、やはり必要なステップとそうでないステップというのがありますので、このCARSモデルは分野の多様性にも対応しているかと思



ます。

そして、実際、皆様に注意していただきたいのは、これは、ムーヴ1、2、3と番号で並んでいると、このとおりにイントロダクションが進むと思われるかと思えます。おそらく、このムーヴ1、2、3の流れが多いです。ですが、このムーヴ1、2、3は繰り返し現れるということがあります。例えば1、2、1、2、3とか、1、2、3、2、3というふうに、繰り返し利用されることが多々あります。Swalesもここに注釈として、特にムーヴの1と2については繰り返し交互に出てくることも多いですよということを書いています。

ですので、このモデルだけを見てしまうと、どうしてもしりニアですね。縦に流れるイメージを持たれるかと思うんですが、実際にはそうではなくて、繰り返し登場するステップやムーヴといったものも出てくるということです。

ジャンルに基づく文章指導

では、この分析に基づいて指導をしていくわけですが、ジャンルを認識するということからライティングが始まるというふうに、考えていただきたいと思えます。このジャンルを認識する、もしくはジャンルの分析を行うにあたっては、書き手としての視点だけではなくて、やはり観察者としての視点というのが重要になっていきます。

さらに、ジャンルに関する知識は、母語のライティングにももちろん役立つのですが、実際には外国語でのライティング、第2言語でのライティングにおいて、特に重要だと解釈されています。それは、母語であれば、ある程度、言葉の壁というのは少なくなるかと思えます。もちろん学術論文のような難易度の高い、高度なジャンルであれば、書いたことのない学生であれば、戸惑うこともあると思いますので、先ほど示したテンプレートのようなモデルを示すことによって、どんな目的があるのか、どういうふう構成をしたらよいのかということ、書き手に分かりやすく明示的に伝えることができるという利点はあります。その点で、母語のライティング、それから第2言語でのライティング、両方に役立つのがジャンルに関する知識です。

もっと言えば、第2言語で習ったライティングの知識が、第1言語、つまり母語でのライティングにトランスファー、転移されることもありますし、逆に母語で習ったライティングの知識が第2言語でのライティングに転移されるということもありますので、このジャンルの知識を取り入れて、母語でのライティング、それから外国語でのライティング、双方へのよい効果が見込まれるかと思えます。

このジャンルに関する文章指導なんですけれども、実際に欧米では非常に一般的に普及してしまっていて、ライティングの授業やライティングセンターで、すでに文章指導が行われております。ライティング教育でジャンル概念の重要性が広く認識されていて、その分析の手法も、当時は研究に用いるものだったんですが、今では指導の段階で取り入れられ、教育的価値も認知されております。ですので、日本でもぜひ、このライティングの指導にあたり、ジャンル分析、もしくはジャンルの概念を取り入れて、指導してみたいと考えております。

ジャンル分析を行っていく意義は、指導と絡めていきますと、まず対象となるジャンルが有する目的と構成要素を理解するという事です。これは、指導者側はもちろんですけれども、書き手自身も、そのジャンルの持つ目的、構成要素をしっかりと理解することが大事です。扱うジャンルによって慣習も違います。表現技法も変わってきますので、それぞれの特徴を把握するということが、非常に重要になっていきます。

また、今回はライティングに関する指導で、〈ジャンル〉という概念を用いていますけれども、実際にはこの知識があれば、文章を読むとき、つまり学術論文を読むときにも、どういった展開で構成されているのかという背景知識があれば、論文の理解が進むということで、リーディングにも役立つということが分かっております。なので、ライティングだけではなくてリーディングにも活用できます。

また同一ジャンル、例えば学術論文を扱うにしても、研究領域によって言語の特性や慣習は異なってきます。大きく分けると、人文科学、社会科学、それから自然科学の3領域になりますが、実際にこのジャンルの分析を行ってみますと、例えば人文科学の中でもさらに細分化

されて、分野ごとに少しずつ慣習や特徴が違うということがあります。ですので、この点をしっかり把握することが大事になっていきます。例えば先生方ご自身のご専門の分野と、指導する学生の専門分野が違った場合などは、要注意なわけですね。ご自身の分野で当たり前とと思っている論文の構成や言語の特性が、教える学生さんの専門分野では違ったということによくありますので、注意が必要になっていきます。

授業での〈学術論文〉指導

では、授業での指導の基本的な流れを見ていきましょう。大まかに6つの流れになっていくと思います。今回、学術論文の指導例を出していますが、これはいかなるジャンルであっても、この指導の流れは変わらないと思います。

まずは①学術論文の特徴や慣習を、しっかり書き手に理解してもらいましょうということですね。具体的には、コミュニケーションの目的。どうして学術論文を書くのか、何のために書くのかということ。それから、読み手はいったい誰なのか、どんな内容を書けばいいのか、言語的な特徴はあるのかということ、確認していくということです。

続いて、②〈学術論文〉を書くための心得というものが大事です。もちろん、論文を書き慣れている方であれば当たり前のことなんですけれども、初めて論文を書くという学生であれば、やっぱり基本から押さえる必要はあるかと思います。とりわけ引用の問題というのは、非常に重要です。これは学術論文ではなくても、アカデミック・ライティングそのものでも、引用を扱っているかと思うのですが、再度確認をする必要があります。さらに、論文ですと投稿先があるわけですので、その投稿先の規定を確認してみるとということも大事ですね。

次に、③〈学術論文〉全体の構成はどうなっているかを見ていきます。ここで、やはり当該分野によって構成は異なってきますので、全体構造をじっくり確認することが大事です。

全体の構成が終わりましたら、④各セクションの構成を見ていきます。これも分野によって異なっていきますので、後ほど詳しく説明します。モデルとなる論文を使っ

て、このセクションの構造を理解するにあたって、ジャンル分析を行うことをおすすめします。

分析が終わって、セクションの構成がある程度理解できたところで、では、実際に書いてみましょうということで、⑤〈学術論文〉の執筆を行っていきます。このときにも、モデルとなる論文を参照したり、ジャンル分析の結果を利用することがおすすめです。

そして最後に、論文を書いて、執筆しました、書けた、終わった、提出ではなくて、⑥振り返り、フィードバック、書き直しということが大事になってきます。つまり、ちゃんと書けたのか。自分の文章のよい点、もしくは改善点はあるのかどうか。モデルの論文との違いはあるのだろうか。第三者が読んでも分かりやすい文章になっているのかなどなど、さまざまな振り返りのポイントがありますので、フィードバックを通してそれを行っていきます。フィードバックを行った後に書き直し、これが重要になってきます。

後ほど詳しく説明していきますが、今回はピア、つまりクラスメート同士で文章を読み合って、対話を通してフィードバックをする方法を紹介します。もちろん教員の方もフィードバックを行ったり、何かサポート、支援を行って行って、最終的に書き直しを促し、よりよい文章、よりよい論文の作成を目指しましょうということを行っていきます。

今、ざっと流れだけ説明させていただいたのですが、詳しく見ていきます。

〈学術論文〉の特徴と慣習

ここは、皆さんは特に問題はないんですけれども、例えば初めて論文を書く学生さんに示すとしたら、こういう感じの情報になるかなということ、私の方で提示しています。そもそも学術論文って何だと思いませんか、そういう質問から入ったりして。当たり前ですけれども研究成果ですね。学術的な研究成果を発表するための論文なんです、そうと分かっていない人もいないかもしれませんよね。

大事なこととしては、先行研究を踏まえた上での新しい発見を提示するというのが、レポートしか書いていない学生さんだと、ここはなかなか難しいかと思いま

す。そもそも関連する先行研究を読んだことがないという場合もありますので、既存の知識、すでに確立されている分野の蓄積された知識の上に、さらに新しい発見を重ねていくというところが、論文の醍醐味になっていくということですね。そして、学術雑誌に掲載されるということで、研究者同士のコミュニケーションの手段となり得るといところが、ポイントになってくるかと思えます。

おそらく学生さんですと、これまでは教員に向けて書くとか、あったとしてもクラスメートに向けて書くとか、その程度の読み手の範囲だったと思うので、なかなか第三者に向けて書くという経験は少ないかもしれないですね。そのあたり、誰に向けて書くのかということがポイントになります。

具体的にコミュニケーションの目的としては、繰り返しになりますけれども、研究成果の発表。受け手、もしくは読み手は、同じ分野の研究者、もしくはその分野に関心のある研究者ですね。なので、この読み手を常に意識して書くということです。誰に向けて書くのかということが、ポイントになってきます。

情報としては研究の内容で、使用する言語としては、もちろん書き言葉ではあるんですけども、フォーマルな言葉になりますよね。学術論文的な言語、アカデミック・ランゲージとも言われますけれども、研究分野の内容を伝える上で、専門性が高くなっていくということも、ポイントかと思えます。

〈学術論文〉を書くための心得

次に、論文を書くための心得ですが、この引用の規則については、論文を書くレベルであれば、おそらく理解はできているはずなんですけれども、理解があいまいだということはあるかと思えます。では、「なぜ引用しないといけないのですか。」このあたりを問い掛けてみるというかなというふうに思います。場合によっては、「先生にそう教わったから」とかね。それではちょっと心配ですよ。そういう問題じゃないですよということで、剽窃の問題と絡めて指導することが重要です。

それから著作権の問題ですよ。近年、世間をにぎわしているいろいろな出来事がありますけれども、1人の

研究者、もしくは研究者の卵として書くわけですので、剽窃の問題、それから著作権の問題は、真摯に扱って理解をしていく必要があるかと思えます。学生さんに示すとしたら、文献からの情報は必ず引用をして、参考文献もしくは引用文献のリストを付けて示すということです。それから、学問分野によって書式が異なるので、実際に論文を見て、書式を確認してみましょうということも大事かと思えます。

さらに投稿先の規定について、例えば構成だったり字数の制限、それから、図表や文献の書き方など、さまざまな規定がありますので、どんな規定があるか、一緒に読んでみる、確認をしてみるということも大事になっていきます。

ここまでは、論文を書く以前の段階なんですけれども、初めて書く人には、やはりなかなか大変かと思えます。ここまで、基本中の基本なんですけど、しっかり押さえていくことが大事です。

〈学術論文〉の全体構造

では、早速ですけども、学術論文の全体の構造について、皆さんと一緒に考えていきます。繰り返しになりますが、いろいろな分野がありまして、その全体構造は異なっています。指導する上では、やはりこの学問分野間、それから分野内での、相違点や類似点があるので、それを理解することが大事です。

理工系の分野ですと、IMRD (Introduction-Methods-Results-Discussion) の流れが一般的だと言われているんですね。多くの理系の論文ですと、序論—方法—結果—考察の順番で章立て、セクション構造がされていることが多いです。ですが、これはあくまでも理工系分野の、大多数ではありますけれども、全部ではないです。なので、今から皆さんと一緒に、ご自身の分野、もしくはご自身が教える学生さんの専門分野で、どんな論文構造がされているのかということを確認していきたいと思えます。

ここで、資料ですね、学術論文の全体構造と書かれている、この表1が載っている資料もご覧ください。

ここには、Paltridgeという研究者の2002年の論文を出しているんですが、この研究者は、博士論文と修士論

3. (学術論文) の全体構造

【本日の練習①】

自分の専門領域における学術論文誌に掲載されている論文の構成はどのようなになっていますか。表1にある4種類の構造のうち、どれかに当てはまりますか。

表1. 博士論文・修士論文における全体構成 (Paltridge, 2002, p. 135)

Summary of thesis types	
Traditional-simple	Topic-based
Introduction	Introduction
Literature review	Topic 1
Materials and methods	Topic 2
Results	Topic 3 etc.
Discussion	Conclusions
Conclusions	
Traditional-complex	Compilation of research articles
Introduction	Introduction
Background to the study and review of the literature (Background theory)	Background to the study
(General methods)	Research article 1
Study 1	Introduction
Introduction	Literature review
Methods	Materials and methods
Results	Results
Discussion and conclusion	Discussion
	Conclusions
Study 2	Research article 2
Introduction	Introduction
Methods	Literature review
Results	Materials and methods
Discussion and conclusion	Results
Study 3 etc.	Discussion
Introduction	Conclusions
Methods	Research article 3 etc.
Results	Introduction
Discussion and conclusion	Literature review
Discussion	Materials and methods
Conclusions	Results
	Discussion
	Conclusions
	Discussion
	Conclusions

参考文献

Paltridge, B. (2002). Thesis and dissertation writing: An examination of published advice and actual practice. *English for Specific Purposes* 21, 125-143.

文における全体構成について、4つの大まかな構造があるということを紹介しています。今回扱うのは、博士論文や修士論文ではなくて学術論文ですが、そうはいつても、ある程度似ているのではないかなというふうに思います。

【本日の練習1】ですが、皆さん自身の専門領域における学術論文誌に掲載されている論文の構成は、以下の4つのうち、どれに当てはまるでしょうか、考えていただきたいと思います。場合によっては、この4つに当てはまらないということもあるかもしれないですね。

例えば、私だったら応用言語学で、「Traditional-simple」の形が一般的なんです。では、皆さんそれぞれ、どの構成が一般的か。1～2分時間を取りますので、ちょっと共有していただいでよろしいでしょうか。

<話し合い>

大野 この時点で、疑問、質問はありますか。

発言者A この「Topic-based」のトピックというのは、どういうイメージを持ったらいいんでしょう。

大野 そうですね。では、同じ資料の次のページを見ていただけますか。具体例を載せています。資料の教育学の方ですね。「Topic-based」の例を載せています。初年次教育学会というところから選んでいるんですが、まず1つ目、アメリカ合衆国の初年次教育の方を見ていただくと、まずイントロダクション、「はじめに」がありまして、その後、トピックに基づくセクションのタイトルが付いていて、トピックに応じた内容を扱っているので、例えば方法とか結果とか、そういったセクション名にはなっていませんね。

ですが、最後に、「おわりに」というコンクルージョンはありますので、イントロダクションとコンクルージョンはありますけれども、その間は、それぞれ書き手自身の調査、研究のトピックに応じてタイトルも変わりますし、内容も変わっていくというような流れになっています。

発言者C これは、要するに仮説を立てて、検証するか実証するというタイトルではないわけですね。

大野 そうです。

では、【本日の練習2】の方を見ていただけますでしょうか。abcdefの6つの全体構造ですね。例えばa、bは同じジャンル、薬学から取っています。そしてc、dも、心理学なんですけど、同じジャンルから取っています。そしてe、fも教育学で、同じジャンルから取っています。それぞれ類似点と相違点を見比べてみてください。どの点が似ていて、どの点が異なっているのか、1～2分ディスカッションしてみましょう。もちろんトピックは異なりますので、全体構造の点で、どう似ていて、どう違っているのかということをお話し合ってみましょう。

<話し合い>

大野 何かおかしな点がありましたか。

【本日の練習②】
6つの全体構造を見て、学問分野間・分野内の相違点と類似点を見つけてみましょう。

a. 薬学 (Traditional-simple: 序論-方法-結果-考察)

YAKUGAKU ZASSHI (2016). 136(10), pp. 1401-1413
「薬局薬剤師のマスク着用による表情の視覚的情報減少は援助要請者の抱く信頼感に影響するの？」

緒言
方法
1. 研究の概要
2. プレ調査
3. 薬剤師映像の作製
4. 調査期間及び対象者
5. 調査の手順
6. 質問紙の測定内容
7. 分析方法
8. 倫理的配慮

結果
1. 被験者属性
2. 透明マスク/通常マスクを着用した薬剤師に対する信頼感の比較
3. 透明マスク/通常マスクを着用した薬剤師に対する印象の比較

考察

b. 薬学 (Traditional-simple: 序論-方法-結果&考察-結論)

YAKUGAKU ZASSHI (2016). 136(8), pp. 1161-1169
「製造方法がワセリン軟膏の製剤学的性質に与える影響」

緒言
実験の部
1. 原料および試薬類
2. 製造方法
3. 品質に影響を及ぼす製造工程
4. 製剤学的性質の評価方法

結果及び考察
1. 製造条件と製剤学的性質の関係
2. ワセリン軟膏の内部の状態と製剤学的性質の関係

結論

c. 心理学 (Traditional-complex)

心理学研究 (2016). 87(3), pp. 219-228
「ゴミのポイ捨てに対する監視カメラ・先行ゴミ・景観・看板の効果」

序論*
実験 1
序*
方法
結果
考察
実験 2
序*
方法
結果
考察
総合考察 *セクション名なし

d. 心理学 (Traditional-complex: 結果&考察の統合)

心理学研究 (2016). 87(3), pp. 251-261
「空間配置と色の再認に有効な符号化に関する検討」

序論*
実験 1
序*
方法
結果と考察
実験 2
序*
方法
結果と考察
実験 3
序*
方法
結果と考察
総合考察 *セクション名なし

2

e. 教育学 (Topic-based)

『初年次教育学会』(2015). 7(1), pp. 119-126
「アメリカ合衆国の初年次教育におけるアカデミック・ライティングの評価法—ケンタッキー大学におけるライティング・プログラムとその評価法に着目して」

1. はじめに
2. アメリカ合衆国における評価の歴史的変遷
(1) 教育測定・ライティング理論との関連からみるライティング評価
(2) WPA(Writing Program Administrators)によるライティング評価モデルの提案
3. ケンタッキー大学における初年次ライティング・プログラムと評価モデル
(1) ライティング・プログラムのコース目標と指標としての学習成果
(2) 学習成果を評価するための三つの重点領域とルーブリック
(3) 評価をするうえでの原則

4. おわりに

f. 法学 (Topic-based)

『法学政治学論究』(2016). 105
「明治期の貨幣偽造に関する刑事規制の立法と運用—旧刑法における『法の継受』の位置付け」

1. はじめに
2. 旧刑法の編纂論における「貨幣」
(1) 旧刑法「貨幣ヲ偽造スル罪」
(2) 「貨幣」をめぐる論争とボアソナードの相違
3. 刑事規制における旧貨幣の位置付け
(1) ボアソナードが見た旧貨幣
(2) 律系刑法における「宝貨」の内容
(3) 旧刑法の編纂論と司法運用上の律系刑法

4. むすび

3

発言者A 人類学ですけども、どれか1つに当てはまらないで、全部ありそうというのが。

大野 そうなんです。人類学であれば、研究者によって。

発言者A そうです。研究者の中でもそうだし、何をどういうふう論じるのかとか、いわゆる学術誌の中でも。もちろん、一番オーソドックスなのは、この「Traditional-simple」という形だと思んですけど、例えばフィールドを変えながら、同じテーマで、そのフィールドでの調査ではこういう結果、別のところに行ったらこういう結果というのは、このスタディー1、スタディー2、スタディー3という、「Traditional-complex」型なのかなとも思いますし。

あと、「Topic-based」というのも、いわゆる論文のように仮説がこうで、こう論じて、こういう結論になるというのを最初に提示しないで、まずこれを考えてみようという展開してって、それを引き継ぐ形で、別のトピックを出しながら展開していくというように考えればいいん

だとしたら、これもかなりある。

大野 なるほど。「Topic-based」は、人文科学の分野で多く使われます。社会科学でも、もしかしたらあるのかもしれないですけども、一般的には人文系が多いですね。例えば文学であったり、歴史とかもそうです。今回は教育学を例に挙げています。

皆様に見ていただいたかったポイントとしては、同じ分野の同じ雑誌の同じ号であっても、やっぱり少し構成が異なっているというところですよ。ですから、どれくらいの差異を許容するかということも、指導する側としては重要なかなと思っています。例えば「Traditional-simple」だから、必ずしもこうしなければいけないということではなくて、その研究一つ一つはやっぱり違いがあります。トピックだけではなくて、そのアプローチの仕方とか、ベストな論じ方とかは違ってくるかと思うので、ある程度の多様性を許容するところは大変かと思っています。

特にAとBは薬学の分野ですけども、結果、考察

を同時に述べてしまう方が分かりやすい場合と、結果と考察を分けて書く場合があるわけですね。

また、CとDの心理学でも同じですが、これを見ると、それぞれCの方は実験1、2を扱っていて、結果、考察を分けて書いています。一方Dの方は、実験1、2、3とあるんですが、結果、考察を1つにまとめて論じているんです。このように、質的に調査をしているのか、もしくは量的に見ているのか、または論じやすい方法を採っているのかと思いますけれども、こういった分野内での多様性があるところも、ポイントになってくるかと思えます。

それから、「Topic-based」の教育学の方ですと、Eの場合は「はじめに」、「おわりに」というセクション名が付いていますが、Fの場合は、「はじめに」というふうに始まっていて、最後は「考察と課題」と終わっているんです。なので、こういったふうに、これはコンクルージョンを意味するものかとは思いますが、セクションのタイトルも研究者によってさまざまに異なっているということも、ご理解いただければいいなと思います。

分野間もしくは分野内での相違点や類似点について、一通り見ていただけたかと思えます。次にセクションについて見ていくんですが、指導する上では、例えば「Traditional-simple」の例ですと、1列に並べてしまえば、こういった要素が論文の中には出てきています。しかしながら、本論というのは、この序論からコンクルージョンまでですよねというところを、学生さんと確認していただきたいと思えます。

さらに、今回このワークショップでも、序論と結論、イントロダクションとコンクルージョンを中心に扱っていきますが、この2つが呼応しているということが、非常に重要になっていきます。特に初めて論文を書く人ですと、それぞれセクションが分かれているということは理解できても、どういうふうに関連しているのかということまで、なかなか大きな視点で見ることが難しいんですね。ですから、論文を書き始める前、それから書き終わった後に、序論と結論が呼応できているのかどうかということを確認させるという作業は、重要かと思えます。

3. 〈学術論文〉の全体構造 例: Traditional-simple

- タイトル (Title)
 - 著者名と所属 (Name & Affiliation)
 - 要旨 (Abstract)
 - キーワード (Keywords/Index terms)
 - 序論 (Introduction)
 - 先行研究 (Literature Review)
 - 方法 (Methods/Methodology/Experimental procedures)
 - 結果 (Results/Analyses/Data analyses)
 - 考察 (Discussion)
 - 結論 (Conclusion)
 - 注記 (Notes)*
 - 謝辞 (Acknowledgements)*
 - 利益相反 (Conflict of interest)*
 - 参考文献 (References/Bibliography/Work s Cited)
 - 付録 (Appendices)*
- 論文本体
- *必要があれば書く。

初級の学生であれば、例えば全体構造の確認の例なんですが、指導者の方でモデルの論文を選んでいただいて、どのような全体構造になっているか確認させるという方法があります。もしくは、学生がある程度論文を読めるというのであれば、興味のあるそれぞれの論文を持ってきてもらって、全体構造を確認させ、それぞれ類似点や相違点を話し合わせるというような活動もよいかと思います。

各セクションの構成

〈序論〉

では、セクションの内部を見ていきます。まず、序論です。これは導入部分にあたり、本論の最初に出てくるセクションになります。読み手に興味を持っていただくための重要なセクションで、研究の価値を伝える、それから、研究の重要性を伝えるということがポイントになります。

この構成要素については、先ほど CARS モデルの改訂版のところで説明したとおりです。

〈方法〉

次に、方法です。今回は「Traditional-simple」を例に取っていますので、分野によっては、方法のセクションが独立していない場合もあると思います。ですが、例えば「Traditional-simple」の全体構造で独立していた場合は、この方法のセクションを読むだけで、自分が行った研究をほかの研究者が再現して妥当性を検証できるぐらいに、手続きを詳細に述べるということが重要になってきます (野口・深山・岡本, 2007, p.82)。

方法にも構成要素があります。もちろん、これは分野によって変わってきますが、一般的には、ムーヴ1：被験者もしくは検証の対象物についての説明。さらに、ムーヴ2：実験や調査の手順の説明。そしてムーヴ3：収集データの分析方法の説明を、方法のセクションでは述べていきます。

〈結果〉

次に結果ですが、これは考察と並んで、学術論文の要となります。もちろん研究成果をアピールしていきますし、文字の情報だけではなくて、図や表などを効果的に使って示すことが多いです。また、考察と分けて書く場合には、その考察セクションの導入部分にも位置付けられます。

結果についても、4つの大まかな構成要素があります。これは「Traditional-simple」ですと、ムーヴ1：検証の目的や方法の確認、そして正当性を述べる。そして、ムーヴ2：結果の提示と評価。ムーヴ3：先行研究の結果との比較。そして、ムーヴ4：結果の理由と解釈。ムーヴの2と4が必須と言われております。結果の提示、評価、そして解釈、これらが重要になっていきます。

〈考察〉

次に考察です。これは結果に基づいて行われますので、当該研究の分野の中で、どのようにその結果が位置付けられているのかということ、少し大きな枠組みで論じていくセクションになります。また、自身の研究の成果を世に送り出す役割を持っていきます。

構成要素としては3つあります。ムーヴ1：研究の成果、結果の部分のまとめを述べて、ムーヴ2：これまでの研究と関連した新たな示唆を提示する。もしくはムーヴ3：理論的な示唆と新たな課題を提示する、という3つの要素となっていきます。考察は、実はすごく複雑でして、中谷（2016）によると、各ムーヴがさらに3つのステップに細分化されます。繰り返しになりますけれども、やはり分野によってはこのとおりではないこともあるかと思われます。

〈結論〉

考察が終わりましたら、最後に結論になります。結論では、研究の成果や貢献をアピールし、今後の研究の展望を述べるということが、主な目的になっていきます。

ですが、独立した結論のセクションを設ける場合には、先ほどの考察の部分で出した、ムーヴ3（理論的な示唆と新たな課題の提示）を独立させることもできます。

4つの構成要素があります。一般的には、ムーヴ1：主要な研究の成果を要約して、理論的な示唆を提示する。そして、ムーヴ2：研究の限界や問題点を提示する。さらに、ムーヴ3：研究成果がその分野や社会にもたらす貢献を述べる。そして、ムーヴ4：次に行うべき研究案を述べる、ということです。

このムーヴ3については、必ずしも社会への貢献が目的ではない研究もあるかと思しますので、載せない場合もありますね。または、限界や問題点を実際は認識しているけれども、載せないという場合もあるかもしれないですね。そのあたりは、やっぱり個人差や分野の特性もありますが、一般的にはこの4つが構成要素としてあるかと思えます。

学術論文の〈序論〉のジャンル分析に挑戦してみよう！

今日は、皆さんに序論について実際にジャンル分析に、少しだけ挑戦してみませんかということで、課題を準備しました。このアメリカ合衆国の資料を見てください。こちらは、先ほど皆さんに全体構造を見ていただいた、「Topic-based」のEの教育学の全体構造を持っている論文なんです。ですが、ページ数がありますので、今回は冒頭の要約、概要と、あとは序論と結論だけを載せています。今から皆さんに、この西口（2015）の論文の「はじめに」を読んでいただいて、すでに下線が引かれていますので、この下線部分の構成要素は何かということ、7頁のところであげたスライド（改訂版CARSモデル）を参照しながら答えてみていただきたいと思えます。

いきなり「はじめに」を読んでも分かりませんという方は、アブストラクトは日本語で書かれていますので、このアブストラクトは研究全体や概要ですので、これを読んだ上で「はじめに」を読んでいただくと、より理解が深まるかなというふうに思えます。

今から少しお時間を取りますので、「はじめに」の部分、6つの下線部が構成の要素、例えば背景なのか、欠落なのか、追加、正当化、目的、リサーチ・クエスチョ

ン、定義、広報、成果、価値、論文構成、このいずれに当てはまるのかということを読んでいただきたいと思います。

<作業>

大野 皆さんの意見が割れているところが、3番ですね。どうですか。何か私も自信がなくなってきた……。皆さんの意見がすごく割れております。

では、答え合わせをしていきたいと思います。実は私も教育学の専門ではないので、言い訳かもしれないんですが、まず上の方は比較的簡単ですよ。定義ですね。「定義される」と書かれていますので、それは定義だろうということになりますね。

次ですが、まず1段落目、2段落目は、つまり研究領域の確立を目指した段落になっているかと思います。でも、その中で定義、本来はムーヴ3の要素なんですけど、ただ、この初年次教育という領域全体にかかわるキーワードを定義していますので、それを定義することによって、領域そのものを確立するという意図があると思いますので、例外的に上の方で、早い段階で定義が出ているかと思います。

次ですが、欠落ですね。ここで重要なニッチの1つ目が登場しています。いいでしょうか。「しかし」とありまして、「カリキュラムや教授法、評価法について十分に研究されているとはいえない状況にあると言える。」の部分、この「十分に研究されているとはいえない」、これが欠落、ニッチですね。

そして3つ目。私の考えも自信がないので、一応出しますけれども。私も正当化かなと最初思っていたんですけども、皆さんは仮説とか、あと価値を選んでいる方もいましたね。どうですかね。

発言者A 正当化だね（笑）。前から読んでいくと、正当化だ。

大野 そうですかね。先行研究を取り上げて、このアメリカの評価方法を見ることによって、日本の初年次教育の質の向上に資する示唆が得られるという、研究に向け

ての前向きな、肯定的な正当化なのかな、と思ったんですが。

発言者A 欠落。私、何でこれを正当化したんだろう……。 （笑）

大野 ちょっと自信がなくなりました。そして、1つ面白い点は、またニッチが出てくるんですね。欠落です。しかしながら、ということで、「アメリカにおける初年次ライティングの教授法と評価に関する先行研究はみられない」という欠落ですね。ここでたびたびニッチを出しておくということは、その研究の意義を強める働きがあると思います。しかも複数のニッチを組み合わせるというのも、1つテクニックとしてありますね。何が足りないという欠落だけを連呼しているのではなくて、例えば正当化であったり、既存の知識に追加するような、そういうものもあるかと思います。

そして、最後は簡単ですね。目的をしっかりと述べています。「本研究では」ということで、そして論文構成なので、全体的に見ていただけると、ムーヴ1、2、1、2と繰り返されて、最後に3で落ち着くというような流れになっています。

結構難しかったですか。どうですか。

発言者B 3番をちょっと納得していないんです（笑）。私は仮説と書いたんですけど。ほかに仮説と書いた人はどのぐらいですか。

大野 5人。

発言者B 結構多いですね。正当化というのは、例えば今までそうじゃないと思われていたのを、自分の方に引き寄せて正当化することかなと思ったんです。つまり、例えばアメリカのものを参考にするには、そういうことはあまり意味がないと思われていたけど、いや、そういうふうにするのは意味があるんだと言うのは、正当化かなという。

だから、このところで、「日本の初年次教育の質的向上に資する示唆が得られると考えられる」ということ

を、一応こういうふうにして、これからこれを考えていこうという意味で、仮説かな、と思ったんです。

大野 私が見てきたいろいろな情報があるんですが、仮説の場合には、「本研究の仮説は～」と明示して、何とかであるというふうには、特に理工系の分野で多いんですけども、本研究のリサーチ・クエスチョンは何とか何とか、本研究の仮説は何とか何とかというふうには明示して出す場合を、仮説というふうにしてきていたんですね。なので、それとはちょっと系統が違うのかなということで、仮説じゃないというふうには判断をしたんですが。この中で理工系の方はいらっしゃいますか。今日はいらっしゃらない。皆さん人文科学もしくは社会科学の人ですね。

発言者C あとは、論文で仮説とその検証というのはキーになるというふうには、いつも教えているので、やっぱり仮説というのは、任意というよりは必ずなければいけないステップかなというふうな、先入観みたいなのはあったのはありますか。

発言者A 自分で書く論文で、そんな仮説を書いているの？

発言者C 書いています。

発言者A 書いているんだ。ああ、そうか。

大野 それでは、この3番はちょっと保留ですね。違う分野の方にも、教育学がご専門の方にも聞いてみたいと思います。

では、この流れで「おわりに」ですけれども、比較的短いです。皆さんは間のセクションを読んでいないので、ちょっと恐縮なんですけど、「おわりに」を読んでいただいて、構成要素、成果、限界、貢献、展望の4つから選んでみましょう。

<作業>

大野 もし終わりましたら、隣の方と確認をしてみてください。

皆さん、同じでしたね。成果、そして展望ということですね。ここだけ読んで、本当に成果なのかなと、ちょっと分かりにくい部分も確かにあったかとは思いますがすけれども。

発言者A 成果じゃなくても、成果風を書くんですね。

大野 いえいえ。でも4つの構成要素の中から選ぶとすれば、結果の要約、それから理論的示唆に結び付けて、最後、今後行いたいことですね。限界を述べる場合は、「本研究の問題点は～」とか、「本研究の課題は～」というふうには書く場合があるんです。ただ、この文章を見ていただくと、「今後の課題としては」とありますので、この先、将来に向けてのことを述べているということが分かるかと思います。なので、結論は4つムーヴがありましたけれども、今回は2つだけ論じていたということですね。

繰り返しになりますけれども、「はじめに」序論ですね、そこで示した目的と、「おわりに」結論の内容が呼応しているかどうかということが、大事になっていきます。目的を見ていただくと、実は結構抽象的な書き方をされていたんですね。なので、まあ、呼応はしているだろうというふうには、言っていないんじゃないでしょうか。目的を見ると、「本研究では、アメリカの高等教育におけるライティング評価法としてループリックについて検討する」。評価法としてループリックについて検討する。なので、この検討ができていけば、呼応しているというふうになるわけです。

ただ、皆さんが疑問を投じてくださっている、仮説についてなんですけど。この場合だと、「日本の初年次教育の質的向上に資する示唆が得られた」ということになる。もし仮説だとすれば、たぶん得られたということになるんでしょうし、正当化として、ニッチとして位置付けるのであれば、なので、その部分を研究として扱いましたというようなことになるかと思います。

このジャンル分析は、やはり初めての方には難しいと思います。今回、私の方でポイントとなるムーヴやステッ

ブについて下線を引きました。こういうふうにし少し補助をしてあげると、初めてジャンル分析、もしくは論文を書く学生にとっても、ハードルが低くなるかなというふうに思います。慣れていてる方であれば、線を引かずにもうそのまま、分析してみましようというふうに与えてもいいかと思ひます。

初級のレベルでしたら、教員が論文を選んで、ジャンルを分析させる。もしくは学生の方である程度慣れている、もしくはレベルが高いのであれば、論文を複数、2本とか3本選んで、それぞれジャンル分析をさせて、違いや類似点を学生にディスカッションさせるというようなことをしてもよいかと思ひます。そうすることによって、複数の同じ分野の論文であっても、ちょっとずつ構成が違ったりすることがありますので、また言語の特性なんかも把握しやすくなるかと思ひます。

振り返り、フィードバック、書き直し

最後、振り返りやフィードバック、もしくは書き直しについてですけれども、今日は行いませんが、例としては、各学生が書いた論文をセクションごとにジャンル分析させるんです。例えば1回ごとに、序論を扱うとか、方法の部分を扱うとか、それぞれ分けて扱うことができるかと思ひます。

お勧めしたいのは、ピアもしくはグループになって、お互い書いてきたものを読み合うというような活動です。これは、ピアでのフィードバックになりますが、そうしながら、自分が書いた文章とクラスメートが書いた文章の、類似点、相違点を見て、難しかった点や、もしくは疑問点があれば共有しながら、話し合うことができるかと思ひます。

書き手主体の文章指導

そして、フィードバックをして終わりではなくて、ぜひやっぱり書き直しをすすめていただきたいと思ひます。次の部分、主体的な書き手を育てるための指導につながっていくんですけれども、これまでの文章指導というと、一通り教員が書き方を説明して、はい、書いてみましょう。そして、書かせて、提出してください。それでもう終わっていたんですね。でも、そうではなくて、

文章を書くプロセスが大事だということにあります。プロセスといっても、構想段階、ブレインストーミングから始まって、アウトラインをつくったり、下書きをしたり、そして、そこから何度も書き直しをして、推敲をして、最終的に提出をするという、流れがあります。その流れを大事にさせていただきたいと思ひます。文章を何度も書き直すことによって、毎回新たな気づきが生まれていきます。文章は磨かれていきますし、文章を磨く力、技能、それらも習得されていきます。

今日行ったお話のポイントとしては、指導者、書き手という、この一方通行の指導ではなくて、書き手を主体的に考えさせるというような指導方法です。例えば論文の構成について、実際に論文を見ながら分析をしたり、ジャンルに基づいてセクションごとに分析をするというような、作業を取り入れるということです。そして、自分自身が書いた文章の問題点や修正案に、書き手自身が気付けるように支援をしていくことによって、書き手自身が自立した書き手になるということが挙げられます。

この文章診断というのは、非常に難しい、なかなかすぐにはできないんですけれども、しっかり文章を読み込むということが大事になってきます。そして、文章を診断する力というのは、ひいては文章力を磨く上で重要になっていきますので、書く力にも直結していきます。

授業、もしくは、今はメディアセンターでも取り入れられていますけれども、ピア・サポートを積極的に取り入れることによって、自分以外の誰かと、互いに文章を読み合ったり、フィードバックを与え合ったりというような活動を通して、読み手意識を向上させるということが重要になっていきます。誰のために書いているのか、読み手は誰なのかということを常に念頭に置くことによって、独りよがりではない、分かりやすい文章ができあがっていきます。また、協働学習によって学び合いの機会も増えますし、ピアフィードバックによる効果というのは大きく認識されています。

具体的になんですけれども、一般的にはフィードバックというと、どうしても文章の問題点、よくできていない点に注目してしまいがちなんですけど、そうではなくて、文章のよくできている点も、積極的に具体的に褒めてあげるということも大事ですね。学生さんの中には、何と

なく書いてみたというだけで、自分でどこがよくできているのか分かっていないということが、往々にしてあります。この部分、例えば接続詞が効果的に使われているので、前後の文のつながりが分かりやすくていいですねとか、あとは、研究の意義が明示されていて、非常にいいですねとか、そういったように具体的によい点を褒めてあげる。

同様に改善点を与えるときにも、何となく分かりにくいとか、何となくぼんやりしているとか、そういうのだと直せないですよ。どこがどうぼんやりしているのか分かりませんので。例えば研究目的はどこに書いてあるんですかとか、明示するといいですよねというような感じで、具体的に改善点、修正案を述べるような練習が、重要になっていきます。

少し重複はしますが、フィードバックをする際に、対話を通して書き手に質問をしながら文章の問題点や改善案、修正案を考えさせるという手法をお勧めしたいと思います。どうしても、例えば教員と学生ですと、ここができていないからこうなさいとか、パワーバランスができてしまうんですけども、そうではなくて、書き手に質問するんですね。この段落で一番言いたいことは何ですか。例えばこれが、一番言いたいことが分かりにくいというふうに判断をした上で聞いていることなんです。

もしくは研究目的は何となく書かれてあるような気はするけど、あいまいだなと思ったら、研究目的はどこに書かれていますかとか、このような書き方で分かりやすいと思いますかとか、そういうふうに尋ねてみると、書いたつもりだったけど、はっきり分かりにくかったのかなとか、そういったふうに考えさせることができます。

または専門用語が、論文ですのでたくさん出てくるかと思いますが、例えばこの用語の使い方、もしくは意味が分かりにくいです、定義を用いた方がいいかもしれないですけども、定義は必要ですかとか、そういった質問の仕方もあるかと思いますが。例えば読み手が専門知識をすでに持っている人であれば、定義は必要ないかもしれないですよ。なので、誰に対して書くのかということ意識させた上で、定義が必要なのか不要なのかということ、あらためて考えさせるというような機会

になるかと思います。

これは教室だけではなくて、個々で文章指導をする場合に、ピア・メンターの方とかもそうなんですけれども、「ここをこうの方がいいですよ」というふうにするのではなくて、ぜひ、最終的な判断は書き手に委ねてほしいなというふうに思います。「ここは少し分かりにくいけれども、あなたはどう思いますか」とか、「この用語の使い方はこれで合っていますか」というふうに疑問を投げ掛けて、最終的には書き手にしっかり判断させるというところで、書き手のオーナーシップ、書き手が責任を持って、自分自身で判断していくというような力を養っていただきたいといます。これがまさに慶應という、半学半教になりますし、自立した書き手を育てる一環になるかと思います。

まとめ

最後にまとめです。ジャンル分析を用いた指導では、書き手の論理的思考力や分析力を高めることができます。また、コミュニケーションの目的、読み手を意識も向上させることができますので、非常におすすめできる指導方法です。

重要なポイントとしては、どうしてもジャンル分析ですとテンプレートのような形で、ムーヴ1、2、3のような形で出てきてしまうんですけども、これは、画一的な書き方を示しているわけではなく、ムーヴが例えば逆になる場合もありますよね。また、繰り返し出てくる場合もありますので、分野の特徴を理解するということ、生かしてもらいたいですし、効果的な文章を書くための補助ツールとして、柔軟に活用していただきたいといます。

また、同じジャンルを扱うにしても、学生さんの中には、なかなか理解が追いつかない人とか、経験が足りなくてどうしても理解が遅れてしまうという方もいるかと思いますが、難易度を調節するということは大事です。

最後になりますけれども、ぜひ、ピアの力を大いに活用するために、対話を用いていただきたいといます。もちろんピアでのフィードバック、口頭でも、それから文章を読み合うということも可能なんですけど、主体的で自立した書き手への一歩となるかと思いますので、ぜひ

参考文献

- ・佐渡島紗織・吉野亜矢子(2008)『これから研究を書くひとのためのガイドブック』ひつじ書房
- ・佐渡島紗織・坂本麻裕子・大野真澄(編著)(2015)『レポート・論文をさらによくする「書き直し」ガイド—大学生・大学院生のための自己点検法29』大修館書店
- ・Swales, J. M. (1990). *Genre analysis: English in academic and research settings*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ・Swales, J. M. (2004). *Research genres: Explorations and applications*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ・Tardy, C. M. (2009). *Building genre knowledge*. West Lafayette, Indiana: Parlor Press.
- ・中谷安男(2016)『大学生のためのアカデミック英文ライティング—検定試験対策から英文論文執筆まで』大修館書店
- ・野ロジュディー・深山晶子・岡本真由美(2007)『理系英語のライティング』アルク

書き手の成長を支援していきましょう。

II、ディスカッション

後半はディスカッションです。では、せっかくですので、一通り参加者自己紹介と文章指導に関しての疑問や苦勞があればお願いします。

<自己紹介>

大野 ありがとうございます。では、ここからは、もう自由にご発言いただきたいと思います。どなたかお悩み、ご苦勞など、共有できる方がいらっしゃれば、お願いしたいと思いますが、いかがですか。

発言者C 今日のお話で、最後のところで、対話による指導というふうなことを非常に重視しておられて、それはそのとおりだなと思ったんですけども、実際にアカデミック・スキルズの自分の授業でも、対面による指導というのも、もちろんするんですけども、最後の局面というのは、メールで添付したものを添削するというか、赤を入れるというふうな形でありますよね。

そうすると、どうしてもいわゆる推敲といいますか、添削というか、そういうふうな形で、今日お話にあったような対話とか、考えさせるというふうなやり方というのが、うまくできないと思うんです。そのメールベースでの指導というふうなところで、今日のお話というの

は、どういうふうに役立てていけばいいのかというふうなところを、ちょっと感じたところですので、もし何かありましたら教えていただきたいと思います。

大野 まず、どこまで教員が見るかということにあるかだと思います。添削というと、本当にもっと細かな部分まで、もう一字一句見ていくことだと思うんですが、そこまで直す先生方と、そこまでは見ない先生方と、いらっしやると思うんです。そこはたぶんそれぞれ方針があると思います。メールであっても、例えば、どうでしょうね。ちょっと難しいですけども、例えば私だったら、日本語の文章で相手が赤を入れてほしいというのであれば、入れてもいいのかなと思うんですが、全部こちらの意見として相手に伝えるのではなくて、ここは少し意味が分かりにくいけれども、こういう意味ですか、もし違うのであれば、ほかの表現、ほかの説明の仕方を考えてはいかがですかというふうな、投げ掛けることも大事かだと思いますので、指導する側がすべて最終的な答えとしてフィードバックをする必要はないと思います。

そうですね。それは、日本語でも英語でもそうなんですけれども、どこまで教員の方で添削をするかというのは、悩ましいところですね。

発言者C 問い掛けというのを出すときにも、今日お話があったようなジャンルとか、ムーヴとかステップというふうなところを、1つのキーワードみたいにしてみるというのがあるんですかね。

大野 そうです。もし書き手の方とムーヴ、ステップが共有できているのであれば、共通理解として使うことはできるかと思います。

発言者A 私は逆に、すごく具体的なことをお聞きしたいんですけど。スケジューリングというか、管理というか、私の方から一応スケジュールをこういうふうにして、段階的にというふうにするのがいいのかなと思うんですけども、学生はなかなか動きだしてくれないので、どうしても途中で、中間論文のようなものを提出してもらおうというふうなことをするんです。その一方で、

どうしても、研究の中身と私が動かしたいのが合っていないので、中間の論文を提出してもらっても、たぶん学生からすると、中身がないままで何も書けないという、そういう気持ちなのかなと思うんですね。

いったいこれはどれくらい意味があるだろうと、いつも思いながらやっているんですが、でも、これをなくしてしまうと、もうただただ、だーっとなってしまうというので、この中間論文のうまい活用の仕方について、何かアイデアがあれば教えてほしいです。どうでしょう。

大野 その中間論文に求めるレベルはどれくらいですか。例えばどのセクションを書いておかなければいけないとか。

発言者A 結局妥協になってしまって、取りあえず見出しと卒論の構成が分かるようにしてほしいということを行っています。あと、だいたい何を書くかについて、研究が進んでいる部分は、ちゃんと論文のように書いてほしい。まだ未定の部分は、計画として、今後この部分はこういう形で調査をしていくとか、計画という形で書いてほしいと言っているんですが、出てくるのは、本を読んで、そのレビューみたいなのが何となくちょろっとあって、それでおしまいみたいな形なので、これでいいのかなというのがある。

逆に思い切って、卒論を見渡しながらも、その一部だけをきっちりと論文の形でまとめてもらうという方が、意味があるんじゃないかな。

大野 最初から最後まで、何か月ぐらいの期間ですか。半年くらい？

発言者A 卒論のゼミを考えているので、2年間かけて卒論を書く。だから、1年目の段階で中間論文を出してもらおうと思っているんです。

発言者D 本のレビューを書いてくるということは、その人の論文の中の先行研究の部分を書いたんだというふうに、見てあげたらいいんじゃないですか。

発言者A そういうふうに見るつもりで、それでいいんですけども。つまり、私の方からのリクエストとして、何かこう、ある章の一部だけで、もうコンパクトにばーっとならして論じてしまう。そう論じたのが、最終的な成果物の一部に埋め込まれない可能性だって出てくるけれども、一応論文という形で論じるということの方が大切だと思う。それともう1つ気になっているのは、卒論って結構な分量があるじゃないですか。なかなかそれだけの分量を書くのに慣れていないから、取りあえず全体を見渡ししながら、中途半端なものでもいいから出すという方が意味があるのか。どっちをやった方が効果的なんだろう。

大野 分野によりますか。例えば予備研究が必要な分野であれば、予備研究のところまで分かった結果をまとめて出しなさいとか。何かうまい区切りとか、あるといいですね。でも、例えば考察とかは、やっぱり単体としてはまだできないですね。

発言者A 何もできません。そうですね。

大野 なので、たぶんイントロダクションの下書き。いずれにしてもイントロダクションというのは、何度も書き直しが必要なんですね。一通り最初にアウトラインを書いたとしても、ほかのセクションを書いた後に、もう一度結論から戻って、イントロダクションとちゃんと呼応しているかどうかというのを見たりするので、イントロダクションの下書きとレビューとメソッド、どんな手法、もしくはアプローチ。例えば対象となる人とか地域とか、検証すべき事象が何なのかということと、どういふふうに分野を分析したり調査をするのかという、その手法。手法と、可能であればサーチ・クエスチョンと仮説ぐらいまでは、ある程度早めに出ていると安心ですね、先生としても。

発言者A そうですね。

大野 検証したいことがあったんだという。

発言者A 序文を書くというつもりで、取りあえずの形

でまとめてきなさいという。

大野 結果とか結論はやっぱり後になるので、全体をつくるというよりは、書けるセクションを書いてもらうというところを目指して、どうでしょうね、最初のイントロと。

発言者A そうですね。それはいいアイデア。

大野 さっきの全体の構造に戻りますけれど、「Topic-based」の場合と「Traditional-simple」で、またちょっとセクションの構成が違ってきますので、無理なく書くところでしょうね。

発言者A そうですね。

大野 すみません。何かぼんやりとしたイメージですけども。

発言者A いえいえ。でも、この形で一度出してもらえると、今日お話にあったようなフィードバックだとかも、一応やりやすくなりますもんね。

発言者E 今お話があったような、似たようなことで。私はまだ指導とかはしたことはないんですけど、アカデミック・スキルズで出てくる論文ですと、最初ですとやっぱり2,000字とか4,000字の、しかも初めて書く論文という形なので、取りあえず字数を稼いで、取りあえず出してくるという形になってきて、たいがいの場合、今調べてきたことの報告みたいな形になっていて。だから、それはたいいの場合、方法論の1つというか、事例の1つということが多いので、なのに、事例を調べることが目的化しているというか。

でも、あなたがしたいのは、これを紹介することではなくて、これを1つの方法として何か言いたいんだよねというところを、何回も確認する。たぶんそれが、論文全体としては序論とか方法論というところになっていくと思うので、取りあえず書いてもらって、それに対して、自分の論文が何が言いたいのかというのをこっちで

確認して、自分で思い出してもらおうというか、自覚してもらって、目的地はこっちだよみたいな方向に押していくというか、迷える子羊をこっちへ後押しするということ、アシスタント的にはできることなのかなと、今日のお話を伺って思ったんですけど。

大野 一番重要な研究目的を見失うというケースもあると思うんですね。いろいろ興味の範囲が広がってしまって、結局一番重要な目的が何だったのかなということも忘れてしまうというケースもあるので、常にそこは大事ですよ。どの段階であっても、執筆段階であっても、何を明らかにするための論文だったり研究であったりレポートなのかというところは、絶えずそこは1本柱を持ってもらうということは、書き手もそうですし、指導者としても常に確認しながら見ていくことは大事かなと思います。

発言者F 個別のそういう論点もそうなんですけど、自分も今、総合教育セミナーとかアカデミック・スキルズの1年生とかなんですけど。例えば今はまだ学部の2年生ですよ。たぶん論文とは何かとか、レポートとは何かという、その根本的なところというか、グランドデザインが分かっていないですよ。だから、こういう細かいところというのは、ある種それが分かった上で、今はこれをやらなきゃいけないというふうに、今の個別の指導の話になると思うんですけど、たぶん1年生とか、いきなりレポートを書いてみようとか、論文を書いてみようと言われたときに、何なんです、それはと。そのグランドデザインみたいなところをイメージというのをうまく付ける方法というのが、今のところまだ分からないというところですね。

要するに、我々とか大学院生なんかは、いろいろな研究論文とかを見ているし、自分のジャンルで興味があることをやっているの、自分のやっているとか、研究というのはこういうものなんだというイメージがあると思うんですけども、学部生のときとか、いきなりアカスキで、じゃあ、君の興味あることについて論文を書いてくれとかいわれて、論文がよっていう。

大野 そうですね。

発言者F レポートと論文はどう違うのかなとか。あと、実際にレポートといったときに、理想的なレポートというのは何かというのは、やっぱりジャンルによってちょっと違うし、その授業の目的によっても違うと思いますけれども、何ていうか、そもそもアカデミック・ライティングそのものの、もっと大枠のイメージをどういうふうに伝えればいいのかというのが、そこが実は結構根本的な悩みだなという気がします。特に学部生にとっては、そう言われても、最終的な目的地のイメージがわからないまま、ただ調べたことをやっているというのが、さっきおっしゃっていたようなことだと思うんですよね。だから、グランドデザインがないので、どうしても今自分のできることしかやらない。

我々から見ると、論文とかレポートを書くには、こういうステップがあるはずだということも分かっている、今、君はこれしかやっていないという話になるんですけど、でも、それはたぶんやっている側からすると、ある意味、地図がないので苦労しているのと変わらないと思うので、それこそ論文とか、レポートとは、そういうところをうまく何とか、特に1年生に伝えるのに、何かいい方法はないんだろうかというのが、今の個人的な悩みですね。

大野 重要ですよ。私は、読んだことがないものは書けないと思っています。例えばレポートを書いたことがないのに、書いてみてくださいと言われて、感想文とどう違うのという話ですよ。論文も同じで、読んだことがないのに書けないと思うので、やっぱりいいモデルを教員の方で見つけて、読んでもらうというところから始まるというのは、大事ななというふうに思います。

読むことによって、もちろん構成とか慣習とかも分かってくるでしょうし、それからボキャブラリーも増えますよね。アカデミック・ランゲージってどういうふうなのかと思ったら、なかなか、初めて書く人には慣れないこともありますし、専門用語もあると思うので、あっ、定義ってこういうふうにかくのかとか、引用ってこういうふうにするのかということ、実際に見て、読んでも

らって、そこから出発するというのもあるかなと思いますので、リーディングとライティングを有機的につなげて指導していくということは、方法としてはあるかなと思います。

発言者F あとは、例えば、総合教育セミナーとかだと、全く何の知識もない、概説的な知識もない学生も相手にするときもあります。そういったときに、ある程度自分で勉強したような研究論文は、ちょっと簡単でやり方の分かりやすそうなものを選んで、それじゃあ読んでみてということではできると思います。そういう概説的な知識もない人に、これが研究論文というものだから、ちょっと読んでみて、分かった？ というのは、ちょっとできないと思うんですよね。

大野 1年生で論文を読ませます？

発言者F 読ませないです。なので、結局要するにどの辺のものを読むかということ、せいぜい新書とか選書レベルですよ。むしろ具体的な実際の資料なんか読めるわけもないので、どこまでアカデミック・ライティングということを主張できるのかみたいなことが、ジレンマとしてはある。概説書なんてだいたいどれも似たようなことが書いてある。よっぽどとっぴなものじゃない限りはだいたい同じことが書いてある。そうしたら、別に4冊読んでも5冊読んでも、あまり大して何か進歩があるわけでもない。というので、選書レベルになっても、そのままずっと。では実際に本当の研究と研究論文みたいなものがあると、それは難しくて分からない。

特に、いきなり概説と本当の研究のところに、非常に大きいジャンルの差がありますよね。新書とか選書とかのレベルはあるけれども、そこと研究書を接続するのが非常に欠けているというジャンルで。本当はそこは、例えば専門の教育をするのであれば、その辺はもうちょっと細かく指導できると思いますけど、今の我々、特に日吉の教員は、1年生、2年生、そういう専門家になるために、ゼミ形式の授業を受けているわけじゃないので、それをどこまでアカデミック・ライティングできるように主張して言えるのかというところが、ちょっと

あるじゃないですけど、その辺が大変かなと思うんですが。あまりにも専門的なことをやらせるわけにはいかない状況で、どうするのか。

発言者G すみません。意見を言ってもいいですか。昨年、アカデミック・スキルズを受けてみて思ったことなんですけど。先生方、皆さんはいろいろやってくさるというのは、すごく感じていて。でも、やっぱりなかなか分からないなど。実際終わってみて、結局、論文って何だったんだろう、みたいところで終わってしまうのも大きかったなと思って。でも、やっぱり8,000字の論文というものを書いてみたという経験がすごく生きたのかなと思うんです。まだつかめていないけど、何か論文的なものを書いてみたという経験が、すごく生きて。

その後、僕は今ピア・メンターとして、論文に困っている人のサポーターみたいな感じでやっているんですけど、そのピアの活動をやらなきゃということで、論文とは何かみたいな勉強をちょっとしだして、何かやっと分かってきたという感じです。アカデミック・スキルズは、まず書くという経験がすごく生きると思うので、 magari にもいろいろなことをやらせていただいて、それがやっぱり生徒側は受け止めきれないんですけど、後々何か分かってくるものもあるのかななど。答えになっていないんですけど、すごく感じます。

その意味で、ピア・メンターという活動が、結論にもあったと思うんですけど、すごく意義があると思うんですけど、実際やってみるとすごく難しいというか。もし皆さん、先生方がこういう授業をやられて、じゃあ、ピアメン活動をやってみましょうとやったとしても、たぶんできないと思うんですよ。まず相手に対して何を言えばいいか分からないというのと、相手のできていないところを指摘する、悪いことを指摘するというのは、ちょっと言いにくいところもあると思って。

発言者H それが、たぶんGさんのよさですね。激しい先生もいますよ。(笑)

発言者G そういうのもある、分からないですけど、いろいろあると思うんですよ。だから、そういう意味では、

ピア・トレーニングというのはすごく大事だから、ピアとしての能力を育成する。ピアをトレーニングするというのは、どうすればいいのか。僕自身もピアとして成長したいから、こういう場に来ているんですけど、なかなかできるようにならないというか。そういう、自分が実践的に教えていくという中で、論文を書くとは何かみたいなのが分かってきたので、何かを与えていただくというのは、ピア活動はすごく意義があると思うんですけど、どうすればいいかなという悩みがあります。

大野 何かトレーニングとかせず、いきなり本番ですか。

発言者A 逆にそういうトレーニングはあるんですか。

大野 そうですね。以前、早稲田のライティングセンターで働いていたことがあって、そこではピアの方たちが毎週1回、トレーニングをしています。

発言者A やってもらった方がいいんじゃないの(笑)。

大野 それは、例えば専門的な文章を扱うトレーニングとか、あとは、研究計画書を扱うトレーニングとか、留学志望書を扱うトレーニングとか、ジャンルごとに分ける場合もありますし、例えば効果的な質問をするというトレーニングだったり、文書の診断、どこがどう問題なのか、いろいろな問題があるけれども、一番優先順位の高い、つまり最初に扱わなければいけない重要な問題はどこなのかということ、診断するトレーニングをするとか、いろいろな目的があって、毎週トレーニングはしていますね。

司会 この話は尽きないと思います。一応予定が8時で、やっぱり終わりを設けなきゃいけない。みんなそれぞれ自分を振り返るという意味でも、有意義なレクチャーとワークショップをありがとうございました。(拍手)

大野 ありがとうございました。

「学びの連携」プロジェクト 2017年度公開セミナー 効果的な論文指導を目指して——英語論文編

2017年12月13日（水） 18：15～20：00

会場：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎2階 中会議室

どのように英語論文を指導すべきか悩んでいませんか。

本ワークショップでは、論文を効果的に指導する方法を検討し、共有することを目的としています。

論文を指導するうえで大切なことは、論文特有の文章構造を理解することです。まず、論文の全体構造と各セクションに特有の文章構造があることを確認します。

次に、英語論文執筆支援ツール AWSuM（Academic Word Suggestion Machine）を紹介します。

参加者の皆さんには文章指導で経験した苦労や失敗談などを紹介していただき、一緒に解決策を考えていきます。

支援ツールを活用しながら、自立した書き手を育てる指導を目指しませんか。

講師

大野 真澄

慶應義塾大学法学部専任講師

司会

新島 進

慶應義塾大学教養研究センター副所長・経済学部教授

効果的な論文指導を目指して

——英語論文編

新島（司会） 時間になりましたのではじめたいと思います。教養研究センターの副所長をしております経済学部の新島進と申します。本日はお忙しいなか、お集まりいただきありがとうございます。昨年度、教養研究センターのプロジェクトのひとつ「学びの連携」において、効果的な論文指導をテーマに講座を開いたのですが、本日はその第2弾、英語論文編となります。講師は前回に続きまして法学部の大野真澄先生です。大野先生のご専門は言語学、英語教育法です。個人的に、論文を実際に書いたり、指導をしたりする際にソフトウェアの助けというものを考えたことがありませんでしたので、どんな使用法が考えられるのか、お話がひじょうに楽しみです。ではさっそく大野先生、よろしくお願いいたします。

はじめに

大野 ご紹介をありがとうございます。法学部の大野真澄と申します。本日は師走のお忙しい中、そして寒い中をお集まりいただきありがとうございます。

では今日の内容ですけれども、「効果的な論文指導を目指して」ということで英語で論文を書く場合のその指導方法について、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

私自身は慶應の法学部に来る前はライティングセンターで個別文章指導を担当していたりとか、あとは学部の1、2年生に向けた日本語と英語アカデミック・ライ

ティングの指導を担当していました。また大学院生レベルになりますと今度はその指導者を育てる一環の授業で、どのような指導方法が採られるべきかといったことを前の職場では担当をしていました。

専門は応用言語学でして、英語の教授法とか日本語または英語の文章の構造とか、そういったところに興味があります。では、本題に入っていきたいと思います。

英語論文の書き方をどのように教えたらよいのか？

まず今日お集まりいただいた皆さんの共通の関心事というのは、おそらく論文をどのように教えればよいのかということだと思います。そうはいっても実際には皆さん自身も英語で論文を書かれる立場でもあるかと思しますので、どのように教えたらよいのかということと同時にどのように書けばよいのかという、その書き手と指導



者と両方の視点から考えていきましょう。

答えを最初にざっくり示したいと思いますけれども、1つ目としましては文章のジャンルに基づいた指導を行ってはどうかという、提案をさせていただきたいと思えます。このジャンルの定義については後ほど説明をしていきますけれども、今は特に英語のライティングの研究分野であったりとか文章指導の場面では、このジャンル準拠型の文章指導というのが主流になりつつありますのでそのご紹介をさせていただきます。

そしてもう1点ですけれども、ツールを活用して書き手の自律を促す指導を目指しましょうという点です。ツールといいましてもさまざまなツールが、皆さんは思い浮かぶと思います。例えば辞書もツールの1つですし、「Google」検索などで、使われている単語やフレーズなどを調べるといったこと、それもツールになるかと思えます。基本的に今回はテクノロジーを使ったツールということに焦点を置いて、お話をしていきたいと思えます。今回のキーワードとしましては、ジャンル、そしてツール、この2つになっていきます。

ジャンルとは

まずですけれども、ジャンルの定義ですね。もちろん日常生活の中で皆さんもジャンルという言葉が使われると思えます。私たちが日常的に使っているそのジャンルという言葉の意味は、たぶん種類とか類型とかそういったカテゴリーを示すものなのではないかと思えます。

ここで示しているジャンルというのは平たく言いますと、コミュニケーションの種類に当たります。コミュニケーションといいますと話し言葉と書き言葉に大きく分かれるわけですが、今回はその中でも特に書き言葉に着目をしていきたいと思えます。その中でも特に大学という状況、コンテキストの中で学術的ジャンル (academic genre) について注目をします。

例えば授業などで書かれるレポートなんかも1つのジャンルとしてみなされますし、論文や小説の何かを読んで書く書評などもジャンルになります。それから学位論文の卒業論文、修士論文、博士論文、それぞれこれらもジャンルになります。また今回の注目するポイントとなってくるのが学術論文 (research article) ですけれども、

これも1つのジャンルといわれています。左側にさまざまな種類の文章を挙げていますが、実はそれぞれが別個のジャンルと解釈されるわけです。

では、ジャンルとなり得るその要素は何なのかということなんですけれども、1つ大きなポイントとしては、それぞれのジャンルはコミュニケーションの目的が違っているということにあります。例えば授業で書かれるレポートは、その授業の中で出されたテーマであったり課題に対する生徒の、学生の理解度を示すものになるわけです。成果物として授業評価にかかわってくるものになります。

一方、例えば博士論文なんかは博士課程の学生が博士号を取るために自身の研究を執筆するものであって、やはりクラスで書かれるレポートとは大きくその目的が変わってくるわけですね。その目的と同じように文章の構成であったりとかあとは形式で、さらには読み手も異なってくるということで、一つ一つのジャンルにはコミュニケーションの目的が異なり、また構成も異なり形式も異なり読み手も異なるこういった特徴が見えてくることとなります。

ジャンルの基礎的概念

続いて、ジャンルの基礎的な概念についてですけれども、先ほどお話ししたように一番大事になってくるのが、コミュニケーションの目的を明確にするというところですね。逆にそのジャンルを使うに当たっては、どんなコミュニケーションの目的があるのかというところをしっかりと、使い手もしくは指導者が認識をするというところが出発点になってくるわけです。

さまざまなジャンルの目的ですけれども、実はディスコース・コミュニティと呼ばれる集合体で、これはあくまでも概念的なものですけれども、同じディスコースをコミュニティによって共有されることによって、コミュニケーションが成立すると考えられています。

例えば理系のクラスで何か実験レポートの課題が出された場合に、その実験レポートを書く学生、それからそのレポートを出す教員の間でディスコース・コミュニティが成立するわけですね。

例えば法学部の英語教師の私が、その実験レポートを

共有できるかという、やっぱりそれは同じディスコースを共有するコミュニティとは言えないのではないかと思います。その一つ一つのジャンルというのは、実はその使い手であるコミュニティのメンバーによってその目的が共有され、コミュニケーションが成立するということになるわけです。

先ほどもお話しした通り、ジャンルごとに言語の構造であったりとか使われる言語の特性というのがさまざまに異なってきます。さらには、その言語の構造や特性が異なるということなんですけれども、実はそのジャンルを理解するときには談話的要素、形式的要素、構造的要素、それから社会文化的コンテキストに目を向ける必要があると考えられます。

この社会文化的コンテキストの部分は少し忘れられがちなんですけれども、実はどんな状況でその文章が書かれているのかということを理解するということは、非常に大事になってきます。

その理由は文章の書き手であったりとか読み手の状況を詳しく理解するということが大事になりますし、例えば日本の大学で書かれているのか、それともイギリスの大学でさまざまな留学生を相手にした授業の中で書かれているのか、そういった社会文化的コンテキストが異なってくると、またその指導方法というのも変わってくるわけですので、さまざまな側面からジャンルをとらえていく必要があると考えられます。

ジャンル分析

ここまでジャンルの概念についてお話を簡単にしましたけれども、今回のジャンルを用いた指導の1つに重要になってくるのが、ジャンル分析といった手法になります。これは、実はそもそもはテキスト分析の手法の1つになっています。その目的ですけれども、それぞれ論文であったりとか実験レポートであったりとか、留学の志望書であったりとかさまざまな文章ジャンル特有の構造であったりとか、修辞技法（レトリック）を明らかにするためにジャンルの分析が行われるようになりました。

このジャンル分析が盛んになってきたのは1990年ごろですのでそれからもう30年近くたつわけなんですけれども、海外においてもしくは日本において、このジャンル

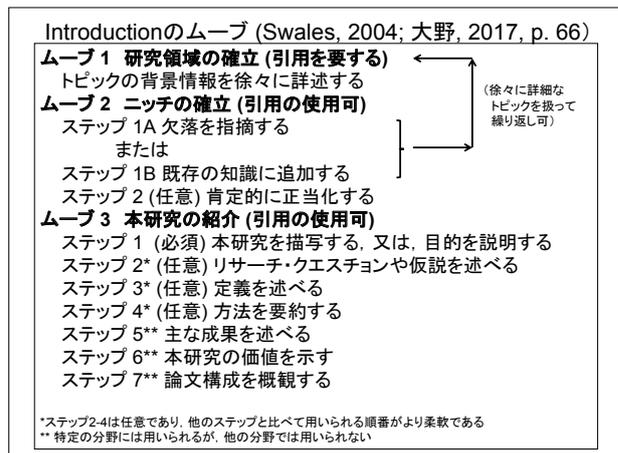
分析を文章指導に取り入れる方法というのがどんどん注目をされていて普及しつつあります。このジャンル分析を最初に開発し、取り入れたのがSwalesという学者です。アメリカのミシガン大学の先生ですけれども、Swalesは学術論文のまず序論に着目をしてその構造特性を明らかにしました（Swales, 1990, 2004）。

この後、学術論文の構造について見ていきますけれども、Swalesいわく学術論文の序論（introduction）の部分ですけれども、これは非常に重要なセクションであると同時に、執筆が非常に難しいセクションであると認識されているということです。

皆さんが普段論文を書いたり指導をされるときに、イントロダクションはいつまたどのように書くべきだとか指導されているのか、非常に私としても興味があります。これはもちろん指導者によってもさまざまなんですけれども、このイントロダクションのセクションの目的というのは、ここにあるように「Create a Research Space」といわれています。つまり研究分野のその研究スペースを作り上げることがイントロダクションの目的だと、Swalesは唱えました。

そして、この「Create a Research Space」モデルというのは、この頭文字を取って「CARS」モデルといわれています。もともとは学術論文の序論のためのモデルであったわけなんですけれども、この「CARS」モデルは今では序論だけではなくて、そのほかのセクションにも応用することが可能だといわれていますしさまざまな研究が行われています。

また学術論文だけではなくてそのほかのジャンル、卒



業論文であったり修士論文もしくは博士論文の例えばイントロダクションの書き方にも、応用できるのではないかとといった研究もさまざま行われています。

では「CARS」モデルについて、早速ちょっと詳しく見ていきましょう。このモデルは Swales がまず 1990 年に確立したんですけれども、その後改訂を重ねまして 2004 年のモデルになっています。

「Create a Research Space」といわれていますけれども、どのようにその研究のスペースを作り上げるのかというところを見ていきましょう。大きく分けると、このムーブというちょっと聞きなれない言葉が出てきていますけれども、イントロダクションのセクションというのは 3 つのムーブ、つまりこのムーブというのは言語のまとまりを表すユニットですけれども、3 つのユニットから構成されていると考えられます。

Introduction のムーブ

具体的に見ていきますと、ムーブは 1 つ目のステップですけれども、そこではまず研究領域を確立しましょうといわれています。つまりいろいろな研究分野、研究領域があるわけですけれども、どういった研究分野のトピックを扱うのかというところを、まず提示すべきだと Swales は言っています。

例えば、法学部ですと、安楽死についてのテーマを扱うのか、もしくは死刑制度についてのテーマを扱うのか、そういったさまざまな研究分野がありますので、まずその研究領域の確立のところではトピックに関する背景情報を提示しましょうというところですね。そうすることによって読み手にその研究分野が何であるのか、そしてどんなトピックを扱うのかというところをまず提示することが可能になります。

次に、ムーブの 2 つ目では、ニッチの確立を行っていきます。これのニッチという言葉、Swales の英語では「Establishing a niche」と言っています。学部の 1、2 年生にニッチの確立という意味はわかりますかと聞いたら、そもそもニッチが分からないと言っていたんですね。日本語にすると、「研究のすき間」に当たるのかなと思います。まだ行われていない研究分野のすき間をしっかりとここで確立しましょう。つまり、そのすき間が何なのか

というところを明示しましょうというのが次のステップになるわけですね。

では、どうやってそのすき間を確立するのかということですが、研究分野における欠落を指摘するということがあります(ステップ 1A)。さきほどの例ですと、安楽死の問題について先進国では十分に議論されてきたが途上国、アフリカなんかではその安楽死の問題はまだまだ議論が十分になされていないなど、そういった研究の欠落というか足りていない部分を指摘するという方法があります。

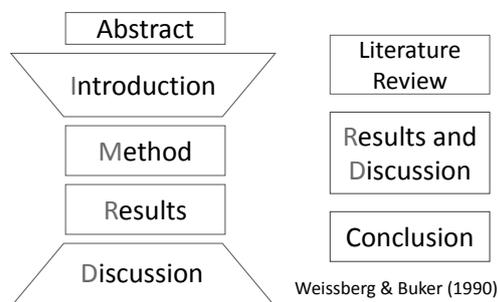
もしくは安楽死の問題について、成人男性とか成人女性の大人の視点からは十分議論されているけれども、未成年者の視点からは十分に議論されていないというような欠落の指摘の方法もあるわけですね(ステップ 1B)。何らかのすき間をこの欠落を指摘することによって、確立するというような方法があります。

または既存の知識に追加するというので、これまで積み上げてきた先行研究にさらに新たな視点や新たなアプローチを付け加えるというような方法も可能なわけですね。例えば、南アフリカではその問題は十分に議論されていたが、ケニアではまだ議論が十分にされていないとかそういった欠落をする方法もありますが、逆にケニアを事例に、既存の知識に安楽死に関する議論を追加していきたいと思うというような感じで、欠落を指摘することなく、知識の追加を行うこともできるわけです。

さらにステップ 2 では、肯定的に正当化するというので、これまで行われてきた研究について、何か異議申し立てとかをするわけではなくて、あくまでも正当化して行って、自分もさらにこのトピックについて研究を進めていきたいというような感じで、自分のアプローチであったりとか視点であったりとか取り組みについて、肯定的にとらえていくというようなスタンスもとれるわけです。

次に、ムーブの 3 つ目では、いよいよこのニッチの確立に基づいて本研究の紹介をしていくわけですね。ここでは実際にこのイントロダクションの中で、では、自分はこういった研究を行っていくのかということを示していくわけですね。ここは 1 から 7 までさまざまなステップがあるわけですけれども、この中でとりわけ重要になっ

実証的研究論文の基本構造:IMRD



自分の研究分野の論文はどのような構造をしていますか？

てくるのが、本研究の目的を明示するというステップ1になります。本研究を描写するまたは目的を説明するというようなステップを踏むことによって、本研究の紹介が可能になるわけです。

さらには、リサーチ・クエスチョンを設定する分野もあるでしょうし、仮説を立ててそれを検証していくような研究分野もあるかと思います（ステップ2）。実は研究分野によってはリサーチ・クエスチョンや仮説を明示することなく、その目的を設定したらそれに基づいて研究手法を述べたりというようなこともありますので、このあたりは任意になります。さらには、ある専門用語について定義を述べるということ（ステップ3）もイントロダクションでよく行われますし、あとは研究の方法について要約をするということ（ステップ4）もあります。

あと5番目のステップが非常に興味深いですが、イントロダクションでありながら、すでにその研究の主な成果を述べるという分野もあります。皆さんの分野ではどうでしょう、研究成果をイントロダクションで述べるということはあるですか。実はこのステップ5については、特に理系の分野でよく見られます。というのは、もう最初にイントロダクションのところで、重要な成果や主な発見を述べることで読み手を一気に引き付ける。この論文は読む価値がありますよ、この研究は読むに値する成果を成し遂げましたよ、ということを明示するというような手法がとられます。

さらにはその成果に伴いますけれども、研究の価値を十分に示すというようなこともイントロダクションで行われます（ステップ6）。研究の価値だけではなくて研

究の意義であったりとか自分の研究のアピールポイントなんかを、最初にイントロダクションで述べるということもあります。そしてステップ7では、論文構成を概観するという行っていく。

この中で任意のステップは複数ありますが、繰り返しになりますが重要なステップの必須のステップというのは、研究を描写するもしくは目的を説明するという、この1つ目のステップになっていきます。

ムーブ1、2、3と番号が振られていますので、どうしてもムーブの順番通りにイントロダクションを並べないといけないかと思われがちですが、実はそうではなくて、例えば研究領域を確立してニッチを説明したら、もう一度トピックについて言及をしてまた新たなニッチを言及するなど、ムーブの1、2は繰り返しが非常に多く行われます。またムーブについても、ムーブ1、2の前にムーブ3が来て、研究の目的を最初に述べるということもあり得ますので、これは流線的なりニアのモデルではなくて、非常に繰り返しが多様化される巡回的な、循環されるようなモデルと解釈されるべきだといわれています。

ここまではイントロダクションのモデルについて概観しましたけれども、皆さんの普段書かれている論文であつたりご指導されている分野のイントロダクションは、類似点もあるかと思いますが違うなというような点もあるかと思います。これは分野によってやっぱり書き方が違うということも、1つ学術論文の書き方の指導においては重要なポイントになってくるかと思います。

実証的研究論文の基本構造:IMRD

ここまでイントロダクションについて見てきましたが、もちろん学術論文ですのでイントロダクションだけが重要なわけではないですね。次に、実証的研究論文の基本構造について見ていきたいと思っています。

皆さんの分野と違いがあるかもしれないですが、実証的研究論文（experimental a research paper）では、まず「Abstract」が最初に来ます。その後で先ほどお話をした「Introduction」のセクションがきて、次に方法で手法を示す「Method」のセクションがきます。そして次に結果の「Results」のセクションがきて、その結果に

基づいて考察を行う「Discussion」のセクションがくるといわれています。

これはあくまでも一例なんですけれども、ここで皆さん自身の分野の論文についてちょっと考えてみたいと思います。今日はさまざまな分野の方がいらしています。今から少し時間を取ってディスカッションをしていきたいと思うんですが、このスクリーンに出ている論文の全体構造で「IMRD」モデルといわれていますけれども、これと同じような構造をされているのか、もしくは異なる全体構造をしているのかどうでしょうか。

発言者A 私も大野さんと近いというか、もともと出身は全然違うんですが、ここ20年以上やっているのは広く言えば応用言語学の範囲なんですけれども、以前はよくCALL研究をやっていたんですけれども、実証的な研究をやろうとすると、このモデルでだいたい書くということになろうかと思います。

ただ近年、私は言語政策とか言語教育政策の方に重点を移しているんで、そうなるとそのデータを取ってそれをあるメソッドでもって分析して結論を出して、それに対するディスカッションを書くということとはだいぶ違って、ある程度の歴史研究なんかだったらその文献研究によっていろいろ経緯を調べた上で、これが例えば今後の政策にどう反映できるかというディスカッションを取るんですけれども、その場合ですといわゆるメソッドの部分をごまかして何かこのような方法でやりますということは、あまり書かないかなとは思いますが。

大野 ああ、なるほど。独立した手法、メソッドのセクションがあるわけではなくて、「Literature Review」というか、これまで行われてきた先行研究のセクションがあってそのままディスカッションと。

発言者A ディスカッションに入るというような感じかなとは思いますが。

大野 なるほど。ありがとうございます。ほかの分野の方はいかがですか。この「Introduction」「Method」「Results」

「Discussion」の流れを取る人が多いですか、それとも異なる構造を取る人が多いですか。

発言者B これは、「Results」というのは当然たぶん実験というか、データ収集的なものを提示するという発想？

大野 そうですね。

発言者B だから、データ収集をしないような研究であれば、たぶん「Results」ってこないですよね。私は普通に言語学で言葉の分析をしていると、たぶん最初に出てくるのはまず自分の理論の枠組みの説明でしょう。人によって結局枠組みが違うとまったくオーディエンスも違えば反応も違うので、まずどういう理論で何を分析するか。例えば言語研修だったらテーマの説明ですよね。

そうなってくると「Results」と「Discussion」がまったく混在してしまう。ある例文を出して、それをどう分析するかというところが必ずしも結果を全部まとめて後で総括というのではなくて、結局データを出しながらそれをどう分析するかというところだから、そこがやっぱりデータを集めてという分析でなければ変わってきますよね、いわゆるより文系的なところであれば。

発言者C Bさん、今でちょっと質問なんですけれども、分析したいのをやるにしろ、やっぱり論文であるのでそれなりの論旨というものがあると思うので、実験の結果という形じゃないかもしれないけど、このペーパーのリサーチの結果は何であるかというのは先に出すということはないという感じですか。

発言者B 言語学なんて、たぶんそれは最初に結論を書いてくれないと誰も読んでくれない。アブストラクトを読んで、結局これが自分の研究とどう関係があるか。それでたぶん判断するから、もうそこにずばり自分の研究で何がほかの人と今までの分析とどう違って、どういう例えば理論的な成果があるかというのを書かないと、もう全然最初からアウトですね。

大野 それはイントロダクションにも書かれますか、それともアブストラクトで？

発言者B アブストラクトで。もう完全に。例えば最初の1ページの3分の1のところ、そこを読まない。たぶんほとんどの人はそこを読んで、その先に行くかどうかをもう決めるという分野なので。イントロダクションを読んでくれないと思います。

大野 ああ、そこまでたどり着かないことも。

発言者B 読ませるのにアブストラクトで工夫をしないと、イントロダクションまでたぶん行ってくれない。

大野 文学の皆さんはいかがですか。

発言者D もちろんさまざまなパターンがあると思いますが、文学の場合は、語彙分析のようなものでなければ基本的に実験やデータといったものが論文に入ってきませんから、メソッドの提示はイントロダクションでおこなうのが普通だと思います。たとえば2人の作家のテキスト比較をおこないます、といったことですね。その程度のものですから。結果もある程度はイントロダクションで示しておいて、という感じですかね。ですので、イントロダクションで論点の提示と結論を示唆したあと、ディスカッションに入るという形になるでしょうか。

大野 なるほど。実は、私は以前文学分野の博士論文の序論の研究をしていたんですけども、やっぱり全体構造を見てみると、こうなっていなかったんですね。取りあえずセクションの見出しがこういったセクションの見出しではなくて、トピックベースになっていたというのがまず大きな特徴なのかなと思いました。

今日はいろいろな分野の方がいらっちゃって、その全体構造を1つ取ってもさまざまなタイプがあるんだなということを皆さんと共有できて非常に興味深いと思っています。実は分野の中でもトピックによってもしくは投稿するジャーナルによって、全体の構造の違いがあったりとかそういった多様化がありますので、指導されると

ときには、そのあたりがちょっと悩ましい部分でもあるかと思っています。

まさに皆さんがお話をされたように例えば応用言語学の分野でも、このディスカッションの後にコンクルージョンをまた最後に付けることもよくあるかなとは思いますが。

もしくは先ほどBさんもおっしゃっていましたが、結果のディスカッションという形でまとめて書いてしまうこともよくあります。それは言語学の分野で主流なのかもしれないですけども、例えば応用言語学であっても質的な何か研究手法を取る場合には、どうしても描写の部分が多くなりますので、データというか発見したこととその考察をまとめて書いていくような方が分かりやすいということで、「Results and Discussion」というセクションを取ることもあります。

発言者A これはやっぱり左側のモデルは実証的研究の中で、特に量的研究を行う場合の典型的な構成かなという感じがしますね。

大野 そうですね。ここは実証的と書いてありますけれども、特にまさにAさんがおっしゃったみたいに、データを使った実験系の分野でよく取られている構造になっていますね。

発言者A おっしゃったように質的研究である程度ナラティブとか聞き取りなんかで、どういうところに理論化ができてその前段階で質的研究をやっている場合には、こんな左みたいにきれいにはいかないということね。それである程度枠組みができたなら、これをその枠組みを使って大量にデータを集めようという段階に移った後はこっちという、そんなような印象がありますね。

大野 そうですね。本当にその分野であったりとかトピックによって、もしかしたらよりよい構造というのが変わってくるということは十分にあり得ます。またイントロダクションの中で、もちろん先行研究に言及することが必須になってくるわけですけども、イントロダクションとは別に独立したりテラチャー・レビューという

形で、先行研究のセクションを設けることも分野によってはありますね。

イントロダクションとメソッドの間に、このリテラチャー・レビューが入ってくるということもあります。指導をする分野の論文構造を十分に複数見て、その主流な構造それから許容できる構造というの、ある程度やっぱり認識をしておく必要があるかなと思います。

ジャンルに基づいた文章指導

ここまで論文の基本構造を皆さんと一緒に考えてみたんですけども、では、具体的にジャンルに基づいた文章指導の方に移っていきますが、今回は学術論文そのものも1つのジャンルと認識できますが、実はイントロダクションも1つのジャンルですしアブストラクトも1つのジャンル、そしてメソッドも1つのジャンルというふうに、セクションをそのまま別個のジャンルとして認識することができますので、そのあたりを踏まえてちょっと見ていきましょう。

ジャンルに基づく文章指導において、重要なことが2つあります。1つ目は自分の扱うジャンルで、対象となるジャンルの知識が大事。これは当たり前のことですけども、しっかりそのジャンル特有の構造であったりとか言語の特性であったり、そういったことを理解しておくという必要があります。

さらには2つ目、適切な言語使用ということでジャンルごとに使われる言語の特性、レトリックの特性というのが変わってきますので、そのあたりもしっかり理解しておくということが、より効果的な文章指導を生むポイントになってきます。

この2つですけども、冒頭にお話ししましたディスコース・コミュニティー、同じディスコースを共有する集団、コミュニティーにおいては、コミュニケーションを円滑にする上で必須になっていきますので、この2つについてまず具体的に見ていきたいと思います。

「ジャンルの知識」についてですけども、まず書き手の皆さんにはどのジャンルを扱うのか、そしてそのジャンルの目的は何なのかというところをしっかりと理解してもらうということです。そのジャンルへの理解が深まるということはすなわち表現技法、レトリックへの気

付きを促すことにつながります。この後で具体的なレトリックについて見ていきますけれども、このレトリックの気付き、レトリックの認識というのが、よりよい書き手を生む重要な点になっていきます。

2点目としてはその対象となるジャンルで、例えばイントロダクションを扱うのか、メソッドのセクションを扱うのか、ディスカッションを扱うのかといった、そのジャンルが有する目的とその構成要素を理解することがジャンルの知識においては欠かせません。例えば、各ジャンルにおいて慣習も異なりますし表現技法も異なりますので、その知識を実際には当該文章を読んだとき、もしくは書いたりするときに活用できるようにしていきましょうということです。

また学術論文と一口に言っても、研究の領域や分野によって使われる専門用語であったりとかやっぱり慣習が異なりますので、どの学問領域、どの研究分野を扱っていくのかというところをしっかりと認識した上で構成を理解する、さらにはレトリックの違いを認識するということがジャンルの知識を深めていくポイントになっていきます。

次に、使われる言語はどういった特性があるのか。やっぱり専門用語 (technical terms) というのは、学術論文では必要になっていきますね。今回、皆さんと一緒に特に考えていきたいのが、「Multi-word expressions」ということです。専門用語以外に語連鎖 (lexical bundles) の表現についてちょっと見ていきましょう。

Hylandという研究者によると、語連鎖とは複数の語からなる連鎖ですけども、これは特定のディスコースをすごい読んだり書いたりする人たちにとっては、非常になじみがあるものだと言っています (Hyland, 2008, p.5)。

同じディスコース・コミュニティーのメンバーであれば、語連鎖に関する知識は十分にあるものだといわれているんですけども、例えば学術論文をこれまで書いたことがない学生であったりとか、研究者の卵といわれる人たちにとってはやっぱりなじみのない言葉になりますので、この語連鎖を自然に使いこなせるようになることを目指していきましょうと目標設定ができるかと思えます。

繰り返しになりますが、この語連鎖というのは専門用語とは異なり、一般的な語の連鎖なんですけれども、そのディスコースごとに使われる頻度であったりとか使い方が異なるといったちょっと難しい点もあります。では、具体的にこの語連鎖を見ていきましょう。

例えば「Hedging」というのがあります。これは論文やもしかしたらレポートなんかでも使うかもしれないですけども、ある表現というか考えを少し弱めたりぼかしたりあいまいにしたり、断定できないときに使う表現を今は列挙しています。この中で皆さんがよく使うもの、もしくはあまりなじみの表現なんかはあるかもしれないですが、これはいったい論文のどのセクションで使われていると思いますか。例えば「Introduction」でよく見られる表現なのか、もしくは「Method」の手法のセクションで使われる表現なのか、結果を示す「Results」で使われるのか、「Discussion」のセクションで使われるのか、どなたか思い当たる表現などはありますか。どのセクションでよく使われると、もしくはご自身がお使いになると思われませんか。

発言者B 最後の方でしょう。

大野 ここで言うとディスカッションとかその後半の方。

発言者B コンクルージョンとかね。

大野 どうしてそのように思いましたか。

発言者B 例えば論文の中で自分が見極めたことは書いて、それがさらにどういう意味合いがあるかというところは必ずしも断定できないので、ここで述べたことがもしかしたら違うあれにも適用できるかもしれないというところは断定できないから、そこでは使うだろうなと思って。そうじゃなければ、ある意味サイエンティフィックな論文だとこういうのはたぶん避けなきゃいけないので、使っていいとしたらそのインプリケーション的なところはたぶんあれなのかなというそういう印象ね。

大野 そうですね。今は模範解答をいただきましたけれども、そうなんですね。ヘッジというのは断定していない。例えば発見したことや結果についての解釈であったりとか、まさにさっきインプリケーションとおっしゃいましたけれども、もしくは示唆を何かするときに使う表現なんですね。この4つのセクションで言えば、ディスカッション、あとはコンクルージョンなんかでも使われることは十分にありますね。明らかになった事柄に対する解釈や示唆や考察ですね。

発言者A 保留というようなこともありますかね。

大野 そうですね。「it is possible」、可能だけれども断定はできないので、確かに保留というような意味合いもあるかもしれないですね。見てみるとどれも断定はしていませんよね。なのでこれが結果に出てしまうと、結局発見されたのかされないのか、何か分かったのか分かってないのかあいまいになってしまいますので、結果のセクションなんかではなくてその後のディスカッションやコンクルージョンのセクションでよく使われます。

このように、語連鎖というのはまさに「it is possible that」とか「it is likely that」、この語の連鎖、まとまりが語連鎖と考えられます。今は5つの4単語からなる語連鎖を提示しています。ですが先行研究なんかを見ますと、実は4つの単語からなる語連鎖が論文の中では最も一般的というか、よく用いられるという結果も出ています。

この語連鎖ですけれども実はジャンルごとに、つまりセクションごとに好まれる語連鎖とそうではない語連鎖というのがさまざまありますので、そのあたりの特徴が指導の上で生かされるのではないかと思います。では、ここまでちょっと語連鎖について見ていったんですけれども、早速、具体的にテクノロジーのツールをどのように取り入れるのか見ていきましょう。

テクノロジーを活用したジャンルに基づく文章指導

最初の方でお話をしたジャンル分析ですね。ムーブといわれるその意味のまとまりと語連鎖という考え方を組み合わせることによって、文章指導がより効果的になる

のではないかというような提言をされたのが Cortes という方です (Cortes, 2013)。さらにはテクノロジーの活用でさまざまなツールが今はありますけれども、そのツールを活用することによって各分野やまたは各セクションにおける文章指導を、より効果的にすることができるといわれています。

さらには、文章指導ですのでそういったツールを用いると学習者、つまり書き手は実際に論文を書きながら論文にふさわしい、もしくは当該ジャンル、セクションにふさわしい適切な言葉遣いであったりレトリックを学ぶことができるといった利点がありますので、このツールもしくはテクノロジーの活用というのは、文章指導には非常に今は有効であるというような示唆がたくさん論文でされています。

今回はこの Cortes が取り入れたジャンル分析と語連鎖の組み合わせといった視点から、テクノロジーの紹介をしていきます。この後、「AWSuM」といったツールを開発された研究者のグループがいますので、彼らのツールについて紹介していきたいと思います。

このツールなんですけれども、英語の学術論文の執筆支援ツールということでもどなたでも無料で使うことができます。例えばコンピューターであったりとかスマートフォンなどで、いつでもアクセスして使うことができます。URL というか、ここにありますのでお時間のあるときにアクセスしてみてください。

「AWSuM」とは、関西大学の水本篤先生を中心に開発されたツールで、「Academic Word Suggestion Machine」の頭文字を使っています。このネーミングには一番こだわったということでした。ちょっとキャッチーですよ。

英語論文支援ツールなので実はもちろん日本人だけではなくて、英語を外国語として学んでいる書き手にも活用していただくことができますので、「AWSuM」というネーミングはそういった意味でも非常に受けがいいのではないかというお話をされていました。

去年から無料で公開されていて、日々進化中ということなんです。今日はそのツールの紹介をこの後していきたいと思っています。

AWSuM でできること

「AWSuM」というツールですが、ネーミングにあるように学術的な単語を示唆してくれるツールになっています。なので執筆支援ツールといわれているわけです。

この「AWSuM」でカバーされている分野は、今のところ「Applied Linguistics」「Computer Science」「Materials Science」の3つなんですけれども、今もさらに多くの分野に活用できるように、データ収集、データ分析を進めているところです。

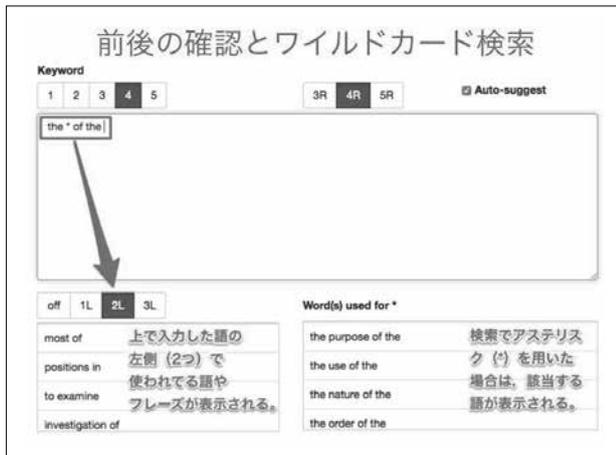
各分野について6つのセクションごとに適切な単語、つまり語連鎖を示唆してくれるという趣旨になっています。先ほど論文の全体構造のところで紹介をしましたけれども、その6つのセクションは「Abstract」「Introduction」「Method」「Results」「Discussion」「Conclusion」ということです。

もしかしたら皆さんの分野では先ほどありました通りメソッドの分野は独立していないとか、あとはリザルトとディスカッションをひとまとめにして書くことが多いとかそういったことはあるかと思うんですが、そのあたりは改良を加えているところですので、より多くの分野にも対応できるように数年中にはなるかと思っています。

では、3つの分野、6つのセクションということなんですけれども、具体的に何ができるのかというと4つあります。まず1つ目ですけれども、「専門分野を指定して、その分野の論文セクションにおける、書くべき内容に応じた頻度の高いフレーズを確認できる」ということです。

つまりこれはコーパスといわれるデータベースがあるわけなんですけれども、世界中の論文のデータベースを基にですね。論文のデータベースといいますと、つまり国際学術誌に投稿されている論文の中で使われている、頻度の高いフレーズを示唆してくれるということになっています。また書き手自身がある単語を入力するごとにその単語の後に続く頻度の高いフレーズ、語連鎖を示唆してくれるというポイントがあります。

何かしら単語を入力しないと、その後にくるもの示唆してくれないというようなことはあるんですけれども、逆に言えば何か単語を入力すればそれに反応して、すかさず、よりマッチするフレーズを出してくれます。



3つ目、「単語やフレーズの前後の確認もできる」というようなこともあります。このあたりはコロケーションを、辞書を使わずとも確認することができるわけです。さらには、書き手自身が検索している単語やフレーズが、実際に論文の中にどのように使用されているのかを、「Concordance」の機能を使って実際の投稿されている論文データにアクセスしながら、提示をしてくれるといったことがあります。

お話しするのは簡単なんですけれども、やっぱりちょっと使ってみないとなかなか分かりにくいと思うんですね。今アクセスできる方は、この「AWSuM」のデータベースにアクセスしていただくことはできます。「langtest.jp/awsum」でアクセスできます。

では、実際に画面というかサイトを見てみるとどうなっているのかということですが、さっきの4点のことができることを提示しましたけれども、前後の確認ができるということで単語を何か入力すると、例えば上で入力した単語の左2つ、この「2L」というのは2つ左側という意味ですね。Leftの意味なんですけれども、2つで使われている語やフレーズが下の部分に提示されていきます。

今はキーワードが4つとなっていますので、4つの語連鎖で検索することができます。このキーワードは1つでも2つでも皆さん自身で選ぶことができます。今度は右上の「3R」とか「4R」とか「5R」とかありますけれども、「R」はRightの意味ですね。右側ですので、4単語右側のサジェストをしてくださいという意味になっていますので、ここを何単語示唆してほしいかをご自身で選択

することができるわけです。

またちょっと高度な使い方ですけれども、アスタリスクを使うことによってここに当てはまる頻度の高い単語を示してくれます。例えば「the 何とか of the」と入力した場合には、例えば「purpose」とか「use」とか「nature」とか「order」のように頻度の高いものを、単語を提示してくれるというような使い方もあります。これが前後の単語の確認、それからワイルドカードの検索ですね。

あとは、さっきお話ししたコンコダンスというのがありまして、実際の論文の中でどのように使われているのかというのを、実際の論文のデータベースに即座にアクセスをして示してくれますので、「this study investigated the」の後に何がくるのかですよ。例えば「acquisition」なのか「attitudes」なのか「authenticity」なのか「beliefs」なのか、その分野ごとによく使われる単語を出してくれます。実際に論文の中でどう使われているのか確認をしたいという場合には、この機能は非常に役に立ちますし、安心して自分の論文にも取り入れることができるかと思います。

詳しい使い方についてはちょっとこのワークショップの中だけではお話しできないですけれども、非常に分かりやすいマニュアルが、「AWSuM」のページに日本語版と英語版とあります。

発言者B これは実際の論文でといっても当然アクセスができないものは表示されない気はするんだけど、結局は普通に制限なくインターネットでアクセスできるような論文に限定されているのかな。

大野 そうですね。

発言者B 逆に、ライセンスが絡むような論文は使っていないということね。

大野 そうなりますね。そのあたりは例えば「Google Scholar」なんかも同じですよ。オンラインで公開されているような論文であれば誰でも自由に見られますけれども、有料なものになりますと、やはりそれはちょっと……。

発言者B あえて排除しているわけだね。

大野 そうですね。では、実際にアクセスしてみましょう。

これが「AWSuM」のメイン画面です。ここのディスプレイのところで applied linguistics とか computer science とか materials science のこのあたりを選んでもらいます。もしくは特に専門分野を気にせずオールでも可能ですね。それから、セクションを自分で選ぶことができますね、例えばさっき皆さんと見たイントロダクションにしようかなとかですね。

あと、イントロダクションはその3つのまとめ、ムーブがあるとお話をしましたが、研究領域を確立するのか、ニッチですき間を確立するのか、自分の研究について述べるのか、その3つのムーブを選ぶわけですが、例えば自分の研究を述べる段階ですね。

そうすると分野とセクションとムーブで、つまり何を今からしたいのかというその目的ですけれども、これを選択することによって右側によく使われるフレーズが自動的に出てきます。ここで何か使いたいものが見つかれば、例えば目的を述べる時のフレーズは「purpose of this」を使えそうだなとか、「the present study words」を使えそうだなとかここから選ぶこともできますし、もちろん自分で入力することもできるわけですよ。

例えば何か目的だから「Aim」かなと入力しますと、この今は「4R」で、右に4つのフレーズを自動的にサジェストしてくれるわけですね。例えば「Aim of the study」がいいかな、「Aim of this paper」がいいかなとこのあた

りは自分で選ぶことができるわけです。

発言者A 右側ということは、つまり Aim も含めて4単語という意味ですか。

大野 そうですね。例えばこれを「5R」にするともう少ししたぶん選択の幅というか、示唆が増えてきますね。「Aim of the study was」、過去形が使われるのかとか。あと、キーワードを1語にしていますが、このあたりで「a current study」ということもできるんだと、このよく使われるフレーズを学ぶことができますね。

下にスクロールすると、いろいろなツールが出ています。慶應でも例えば「COCA」とかは無料でアクセスできます。「Online PhraseBook」なんかもアクセスできますので、このあたりはご自身でお時間のあるときにぜひ見てみてください。これは直接今回の「AWSuM」とは関係はないですけども、テクノロジーを使ったツールということで活用することができます。

発言者B 「COCA」というのはアメリカのブリガム・ヤング大学のサイトなんですけど、一応私の方で図書館にお願いして、英語部会の予算で去年の12月ぐらいから契約してもらっているの。

普通にやると検索数の制限が掛かるんですけど、慶應のアドレスからアクセスすると、自動的にサイトライセンスが適用されて制限がだいぶ上がるので、結構数的にはいきます。普通に図書館のデータベースのページでたぶん「cocac」を入れるとたぶん出るようになっていると思います。自宅からもアクセスできる、リモートサービスというのを登録してもらったので。

それをちょっとクリックしてもらって、その最後の「cocac」というのを削ってくれますか。そうすると、このサイトでどんなサービスができるかの一覧が表明されるの。

大野 すごいですね。

発言者B 「NOW」(News on the Web) というのがウェブのニュースとかを前日までずっと検索をかけている

みたいで、これはたぶん一番多い。「COCA」(Corpus of Contemporary American English)の方が種類としてはいろいろな書いた言葉とか spoken English とかバラエティーはある感じですね。その下はちょっと歴史的なデータが COHA (Corpus of Historical American English) で、時代的に区切ってやるので、ある言葉がどの時点から増えているかとか。

下の方についてもらうと、ちょっと使いにくいんだけど、「Google books: Ngram」があって、これだとちょっと普通の「Google」検索よりも「Ngram」がかかっているのいろいろな検索ができる。ある動詞の前にどんな名詞がくるかとかそういうのは調べられるんですけど、ちょっとそこはまだ建設中で若干不具合が多いんです。だから、普通の「Google」の内容をちょっとコーパス的に使おうと思ったときには、下の方のリンクを使ってもらってやりやすいですね。

大野 いろいろなツール、テクノロジーがありますので、ご自身のニーズに応じてということですね。

私が一番最後にこの「AWSuM」についてお話をしたかったのは、リストのところ、実はここに非常に重要なデータが入ってしまっていて、これをクリックすると、アブストラクトでは例えばこういった要素が含まれますよ、イントロダクションではこういった要素が含まれますよ、メソッドではこうですよと一覧が出ています。今回は全部扱うことができないですけども、時間があるときに例えば自分でそういえばディスカッションに何を書けばいいのかなと思ったときには、ここを開いていただくと書いてありますのでこのあたりもぜひ活用してください。

これは、すでにもう論文に投稿されている研究結果として出ています。

ジャンルに基づく論文指導：授業実践の例

では、「AWSuM」を使った授業の例というのはすぐこの後紹介しますが、そもそもジャンルに基づく指導ってどうするのかということなんです。

例えば初めて論文を書く学生さんであれば、そもそも学術論文って何なのか、その目的は何なのか、読み手は

その他のツール(水本, 2017, p.121参照)

<語法・類語・コロケーション>

1. Sketch Engine (<https://the.sketchengine.co.uk/open/>)
British Academic Written English Corpus (BAWE) などの検索が可能。Word sketch ではコロケーション、Thesaurus では言い換えの表現を探ることが可能。
2. StringNet Navigator 4.0 (<http://nav4.stringnet.org/>)
語を入力すると、語法やコロケーション、そして用例が表示されます。
3. WriteAway (<http://writeaway.nlpweb.org/>)
語を入力すると、語法や文法などのパターン、そして用例が表示されます(和訳あり)。
4. Just The Word (<http://www.just-the-word.com/>)
語を入力すると、語法や文法などのパターン、そして用例が表示されます。BNC を利用。
5. FLAX (Resource Collections) (<http://flax.nzdl.org/>)
語やフレーズを入力すると、頻度の高いコロケーションや語法がリスト表示されます。
6. ozdic.com (<http://ozdic.com/>)
語を入力すると、頻度の高いコロケーション、そして用例が表示されます。

<論文の表現集>

7. Academic Phrasebank (<http://www.phrasebank.manchester.ac.uk/>)
The University of Manchester の Academic Phrasebank は論文中で言いたいことが機能別、またセクション別にまとめられている表現集。書籍版はムーブの考え方が取り入れられている。
8. Online PhraseBook (<http://englishforresearch.com/phrasebook/>)
論文中で言いたいことが機能別まとめられている表現集。

誰なのか、どんな言語特性があるのかは分からないわけですね。そういったところをお話しして、さらにはこれはちょっと今回は省きますが、非常に重要なところとしては引用の仕方とか、実は執筆規定というのがあるのですというようなところですね。

全体構造のお話をして、次は各セッションごとにどんな目的があるのかということをお話ししながら、ジャンル分析を行うとよいのではないかと思います。このジャンル分析については、この後で皆さんと一緒にやってみたいと思います。

次に実際に執筆するわけですが、そのモデルの論文を実際に見ながら、それをどんな要素が含まれているのかを考えながら書いていって、お互いに書いたものを読み合っってフィードバックをする。教員の方でも書き直しを促しながらフィードバックをするというような、これが一連の流れになっていくわけです。

ツール (AWSuM) を用いたジャンルに基づく文章指導——アブストラクト編——

今回はこの中でも特にアブストラクトに絞って、皆さんと一緒に取り組んでみたいと思います。実際に大学の学部生にアブストラクトを書いてもらいましたので、事例として、その指導の流れについてもちょっとお話をします。

参加してくれたのは2つの大学の学生さんで、ちょっと少人数ですが、英語専攻の15名、理工学専攻の27名が、それぞれ参加してくれました。

手順ですが、さっきお話しした通りです。まず

全体構造を確認して、各セクションの特徴を確認して、アブストラクトにはどんなムーブで、つまり構成要素、修辞構造が入ってくるのかというのを確認した上で、学生さんたちが200語程度のアブストラクトをまず書きました。

まずこれが初稿になるわけですが、続いて2週目には初稿を基に不自然な表現、自信のない表現に自分で下線を引いてもらって、そこで先ほどご紹介させていただいた「AWSuM」を使いながら初稿を訂正というか、書き直すという流れを取りました。最後にアンケートに答えてもらったというような流れになっていきますので、2週にかけて200語程度のアブストラクトをそれぞれが書いたということです。

では、どうアクティビティーを行ったのかということですが、やはり何もモデルを読まないで、いきなりアブストラクトを書きましょうと言われても何が何だか分かりませんので、やっぱりそのモデルあるいはサンプルとなる論文を読むというのが大事になってきます。例えば一般的な形式を持った論文、アブストラクトを3本読んでみてくださいという指示を出すこともできるかと思えます。

この3本は教員の方であらかじめ読みやすそうなある程度典型的な構成要素を含んだ、流れを含んだものを3つ選んでもいいでしょうし、学生自身に好きな論文3本、アブストラクトを選んでくださいと言ってもいいかと思えます。そのあたりはどんなレベルの学生さんを扱うのか、指導をするのかによって変わってくるかと思えます。

それからその3本のアブストラクトを読んで、センテンスごとにどんな情報が入っているか確認をしましょう、考えてみてくださいというような問い掛けをします。その後で具体的にその情報、どんな情報が含まれているかを見分けることができた理由を考えてみてくださいという問い掛けをして、ペアやグループなどで話し合いをさせるとような指導方法が考えられます。

では、早速なんですけれども、実際に学生さんが使ったアブストラクトを使って、アクティビティーをしてみましょう。今から少し時間を取りますのでやってみましょう。今日はおそらく computing machinery の分野の

(学びの連携) プロジェクト 第1回公開セミナー
「効果的な論文指導を目指して—英語論文編」

2017.12.13
大野真澄

【練習】

- 以下の論文アブストラクトを読んでみてください。
- センテンス（文）ごとにどのような情報が含まれているか考えてみてください。どのような情報が含まれているかを左の四角に書きましょう。（例：results, background, conclusion, method, purpose）
- 「どのような情報が含まれているか」を見分けることができた理由を考えてみましょう。
- 自身の分野で一般的な論文アブストラクトと比べて、似ている点や異なる点がありますか？
- 自身がアブストラクトを書く（または指導する）うえで、難しいと感じることは具体的にありますか？

COMPOSING LETTERS WITH A SIMULATED LISTENING TYPEWRITER

Abstract. ¹With a listening typewriter, what an author says would be automatically recognized and displayed in front of him or her. ²However, speech recognition is not yet advanced enough to provide people with a reliable listening typewriter. ³An aim of our experiments was to determine if an imperfect listening typewriter would be useful for composing letters. ⁴Participants dictated letters, either in isolated words or in consecutive word speech. ⁵They did this with simulations of listening typewriters that recognized either a limited vocabulary or an unlimited vocabulary. ⁶Results indicated that some versions, even upon first using them, were at least as good as traditional methods of handwriting and dictating. ⁷Isolated word speech with large vocabularies may provide the basis for a useful listening typewriter.

※使われている時刻にも気をつけよう

*This abstract was published in *Communications of the ACM* (Association for Computing Machinery) and was modified for this workshop. The activities above were adapted from Mizumoto and Ono (2017).

方はいらっしやらないかもしれないですが、勝手にこのアブストラクトを選ばせていただきました。以下の論文、アブストラクトをまず読んでみてください。センテンスごと、文ごとにどんな情報が含まれているかを考えてみてください。

どのような情報が含まれているかを、左側の四角の中に書いてみましょう。例と書かれてありますが、これがちょっと結構ヒントになっていますね。「Results」「Background」「Conclusion」「Method」「Purpose」の5つありますので、たぶんすぐ分かるかもしれないですがどんな要素が含まれているかを四角の中に書いてみてください。その後で、どんな情報が含まれているかを見分けることができた理由を考えてみましょう。

また皆さん自身の分野で書かれているアブストラクトと、computing machinery のアブストラクトの何か違う点、もしくは似ている点があるかどうかをちょっと見てみてください。

最後ですけれども、ご自身でアブストラクトを書くときまたは指導をするときに、何か難しいなど具体的に感

じることなどがあれば、この後で共有させていただきたいと思います。では、5～6分時間を取りたいと思いますのでまずやってみてください。

一語一句内容について理解できないと思いますし、理解されることが目的ではありません。今回はあくまでもそのアブストラクトに含まれる構成要素で、情報が何なのかというところを分析するというのがポイントになりますので、単語の意味があまり分からなくてもお気にさらないでください。

<アクティビティー>

はい、どうですか、一通り書けたでしょうか。実はちょっと今回のこの練習は簡単にしてありますので、例のところに5つの要素が挙がっているわけですが、これを1つずつ当てはめていくというようなことが一番シンプルに回答する方法かなと思います。では、順に見ていきましょう。まず一番最初は何が入りましたか。

参加者 バックグラウンド。

大野 そうですね。これは、皆さんだったらたぶんバックグラウンド。もしくはアブストラクトなんですけれども、そのトピックのイントロダクションと考えられるわけなので、どちらを書いてもいいんです。背景情報ということですね。では、ちょっと順々に出していきますけれども、2番目はパーパスでどうでしょうか。そして次がメソッド、リザルト、コンクルージョン。

繰り返しになりますけれども、学生さんのレベルに応じて、ヒントなしでやってみるというのも面白いかなとは思っています。どういうふうに学生が文章の情報を読み取って、構成要素として認識するかというところを見てもいいかなと思いますし、今回みたいにヒントを出されてもいいかなと思います。

この流れなんですけれども、実は先ほど紹介させていただいた「AWSuM」の中にはこう出ていました。「Introduction」「Purpose」「Method」「Results」「Conclusion」があるんですが、これはアブストラクトの大きな意

味のまとまりでユニットはこの5つになるわけです。「Introduction」は「Background」のことですが、背景情報を示すに当たっていろいろな方法がありますということで右側にその方法を示しています。

例えばトピックのその重要性について述べるとかトピックの背景情報、一般化された情報について述べるとか、あとは専門用語や何か語句の定義をしたりとか。さっきニッチを確立するというのをイントロダクションですとお話ししましたが、そういったことも可能です。詳細なステップまで共有したい場合は表なんかを使って、学生さんに示すこともできるかと思います。

これは繰り返しになりますけれども、ステップを例えば5つ全部使わなければ、バックグラウンドの確立にならないのかというと、そうではないですね。どれかしらできていれば、ひとまずバックグラウンドは確立すると考えられます。メソッドについても3つ出ています。協力者の参加者の情報を提示するとか、使った道具とか器具について説明をするとか、その手続きについてもしくは条件について説明をする。

いろいろステップが分かれていますけれども、これは全部しなきゃいけないかというとも必ずしもそうではありません。語数制限もあります。アブストラクトはそんなに長く書けるセクションではありませんので、そういった制限の中でどの情報を優先させるのかというところを考えながら指導されるといいのかなと思います。

実際、さきほどの学部生が書いたときには、一通りもうアブストラクトに入れる情報をこのように提示しています。これを基に学生さんは、英語でアブストラクトを書いてみたというような流れになっています。全員で同じトピック、同じ構成要素を使って書き方を学ぶということを第1週目のときに行いました。

さっき見ていただいたアブストラクトについてですけども、ご自身の分野で書かれるアブストラクトと、何か似ている点や異なる点などをお気づきになりましたか、どうでしょう。おおむねこの5つの要素が入ることが多いですか。

発言者A 一番最初のところで議論したようなことと重なりますけれども、分野によってどこかが一緒になった

りとか強調というか、ある部分は非常にごく簡単に、もしくはこういうアブストラクトだったら特に書かないとかということはあるかなと思います。

大野 なるほど、そうですね。私もいろいろな論文を読んだりしますと、1番のバックグラウンドの部分で背景情報はないアブストラクトも結構あります。というのは最初の話ですけれども、ディスコース・コミュニティが決まってくるので、どんな相手に向けて書くのか。つまり今回は英語の論文指導ということで英語の文献とか例を見ていますが、英語で論文を書く場合でも、日本国内の雑誌はジャーナルであれば、オーディエンスが決まってくるよ。例えば日本の大学の先生であったり研究者であったりということになってきますので、そういった場合はやっぱり背景情報なんかは書かずにいきなりパーパスから始まるということもよくあります。

または、多くの論文ではやはり何らかの結果や成果、発見を書くことはアブストラクトでは多いですけども、最後のコンクルージョンとか示唆のところまで述べていないということもよく見かけますので、やっぱりそのあたりは書き手の皆さん自身がどのあたりを強調されたいのかというところで情報の取捨選択はあるかなと思いますし、あと投稿する雑誌の論文誌の慣習とか傾向によっても変わってくるのかなと思います。

このあたりのバリエーションというのは、分野によってもそうですけれども、投稿する雑誌によっても変わってくるのかなと思います。何かアブストラクトを書く上で難しい点や、ご指導する上で困難だと感じている点など何かございますか。特に大きな問題はないですか。

発言者A 一番大きな困難は、私の年齢だと学生時代とにかくこういう教育を受けていないという、根本的な問題がありますね。例えば同じ年代の方でもアメリカで教育を受けた人だったら全然違うと思うんですけど、私は基本的に日本で教育を受けて、部分的にドイツで教育を受けた人間です。

ドイツで最初からアカデミックワークをどうするかというような、導入のところから入るような段階からドイツにいたならば、結構こういうふうな研究メソッドに関

しても授業を受けたりする可能性はあるんですけど、私の場合は途中から行ったので、日本でそういう部分が欠落したまま向こうへ行って教育を受けたので、本当にきちんとしたそういう方法論の積み重ねがないまま何となく大学院を終えてしまったということがあります。私個人にとっては、その私が受けた教育の欠陥がそのまま私自身の教育者としての欠陥につながっているという、そういう感じがします。

だから、その後にはっきり言えばこういうようなことを学んだのは独学したというしか言いようがなく、自分で人さまの論文を読ませていただいて、さらに査読をしなきゃいけない立場になって、さて、どういう構成で書かれているのかなとか、特にこういうアブストラクトなんかは査読者としては、やっぱり最初に受ける印象によって相当全体も左右され、それによって判断せざるを得ないから。

逆に、自分が書くときとか自分がある程度指導する立場になる若手とか院生とかに対するアドバイスというのは、そういう自分の実践で少しずつ分かってきたことをフィードバックしているという程度なので、非常に情けない状態のまま教員になってしまったというのが本当のところですね。

大野 いえいえ。実は学部によりますけれども、日本語で卒業論文や修士論文を書いたとしても、アブストラクトだけは英語で書かなければいけないというような理工系分野もありますので、大学生には意外とアブストラクトはニーズが高いのかなと思います。論文全部を英語で書くということまでいかないとしても、アブストラクトだけは、例えば学部だけだとそうでもないかもしれませんが、修士ぐらいのレベルになりますと英語で書くようにという指示があったりします。

やっぱりある程度明確にどんな構成要素がどういった流れで入ってくるのかということを明示できると、学生としても目的は最初の方に書いた方が分かりやすいとか、やっぱり最後は何らかの結論とか示唆があった方が読み手を引き付けることができそうだなとか、そういった実感を持って学ぶこともできるのかなとは思っています。

AWSuM を用いた文章指導の結果

では、実際にアブストラクトを書いてみた学生さんの反応をちょっと共有していきたいと思うのですが、実は「AWSuM」を使ったところが今回の大きなポイントになったわけですが、肯定的な反応が多く聞かれたので安堵したというのが率直なところです。

その中でも特にアウェアネスの部分で大きな反響がありました。やっぱりその特徴的なフレーズが何度も使われやすいということが理解できたとか、「AWSuM」があれば自信を持って書けそうな気がする、何か自分だけの力だけではなくてツールを使うことによって何とか論文らしい、英語らしいものができそうだという自信が持てたという声もありました。

自分のあいまいな知識であったりボキャブラリー、それを確認することができたということです。内容や語彙、フレーズ、文法の関連をすべてまとめて確認できたのでよかった、そういった声が多く聞かれました。

それ以外ですと、もちろんポジティブな肯定的な意見だけではないわけですよ。語の使い分けが分かったとか英訳しただけじゃだめなんだということが分かったという反応もありました。「AWSuM」はやっぱり難しい、授業の中だけでは使い方が理解できずに終わってしまったとか、慣れるまでにやっぱりちょっと時間がかかってしまったというような反応もありましたので、1回、2回使ったからといってやっぱりすぐに十分に適用して書くことができるかという、個人差が大きくかかわってきそうだということは学生さんの反応を見て分かりました。

AWSuM の限界点

「AWSuM」だけではやっぱりそのツールとして、指導としては不十分だということなんですけれども、あらためてアブストラクトだけに限らず、当該セクションで書く内容の何を書けばよいのかというところを、サンプルの論文を読むなりジャンル分析をするなりして、その含める要素、情報を理解していなければ、「AWSuM」はなかなか使えないということですね。

それから、何か単語を入力する必要があるわけですが

れども、そもそも単語のつづりを間違ってしまったという場合にはやっぱりサジェストをされなくなってしまいますので、そのあたりは辞書との併用が大事になってくるかなと思います。

「AWSuM」の活用方法としては、やっぱりその活用方法を知っていれば自立した書き手を育てることになりますので、使い方を周知していくことでより学生のニーズに合った、自立を育てるような支援が可能になるのではないかなと考えました。あと、語句の言い換えなどについては、やっぱり「AWSuM」だけでは対応できない部分がありますので別のツールも必要になってくるかと思っています。

まとめ

今回は、ジャンルに基づく文章指導というところをお話しさせていただきましたが、やはりレトリック（修辞構造）に対する意識を高めるところが非常に重要になってきます。ライティングといいますがいきなり書き始めるわけではありませんので、やっぱりどんなジャンル、どんなセクションを扱うのか、どんな目的で書くのかというところをしっかりと理解する、書き手が認識するというのが出発点になるのかなと思います。

ですが「AWSuM」のようなツールの活用というのはやはり効率的、効果的な指導を生みますし、書き手自身の支援にもつながると思います。無料で提供されていますので、ぜひいろいろな学習者というか、書き手の方に周知して共有できていければいいかなと思います。

さらには、やっぱり書き手のニーズ、そして熟達度でどのようなレベルの学生さんなのかというところに合わせて、授業やゼミなんかで扱うタスクで、その難易度を調節していくことが重要かと思っています。例えば学部の3年生、4年生で初めて卒業論文を書く人に対して指導をするのか、院生さんに向けて指導をするのかではやっぱり指導の仕方もそうですけれども、アクティビティーで使うタスクも変わっていきます。そのあたりはニーズをしっかりと把握した上で、熟達度に合わせた指導が求められます。

論文といえますとやっぱり母語で書くのも難しいわけですが、とりわけ英語のような外国語の文章指導

参考文献

- 大野真澄 (2017) 「ジャンルに基づく学術論文の指導」水本篤 (編著) 『ICTを活用した英語アカデミック・ライティング指導—支援ツールの開発と実践—』(pp. 62-77). 金星堂 Retrieved from <http://kuir.jm.kansai-u.ac.jp/dspace/bitstream/10112/11019/6/KU-0020-20170331-06.pdf>
- 水本篤 (編著) (2017) 『ICTを活用した英語アカデミック・ライティング指導—支援ツールの開発と実践—』金星堂 Retrieved from <http://kuir.jm.kansai-u.ac.jp/dspace/handle/10112/11019>
- 水本篤・大野真澄 (2017) 「テクノロジーを利用したジャンルに基づく英語論文ライティング指導の効果」『第43回全国英語教育学会島根研究大会予稿集』(pp. 212-213)

参考文献

- Cortes, V. (2013). The purpose of this study is to: Connecting lexical bundles and moves in research article introductions. *Journal of English for Academic Purposes*, 12, 33-43.
- Hyland, K. (2004). *Genre and second language writing*. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press.
- Hyland, K. (2008). As can be seen: Lexical bundles and disciplinary variation. *English for Specific Purposes*, 27, 4-21.
- Mizumoto, A., Hamatani, S., Imao, Y. (2017). Applying the bundle-move connection approach to the development of an online writing support tool for research articles. *Language Learning*. Retrieved from <http://mizumot.com/files/LL-AWSuM.pdf>
- Swales, J. M. (1990). *Genre analysis: English in academic and research settings*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Swales, J. M. (2004). *Research genres: Explorations and applications*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tardy, C. M. (2009). *Building genre knowledge*. West Lafayette, Indiana: Parlor Press.
- Weissberg, R., & Buker, S. (1990). *Writing up research: experimental research report writing for students of English*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall Regents.

においてはジャンルの知識、それから支援補助ツールを用いた明示的な指導というのが、効果的なのではないかと思えます。参考文献をいくつか挙げましたので、ご興味があれば見てみてください。では以上になります。ご清聴、どうもありがとうございました。(拍手)

司会 周到に準備された、ひじょうにクリアなご講演をありがとうございました。未知のことばかりでたいへん刺激を受けました。では、質疑応答に移りたいと思えます。どうぞご自由に発言をいただきたいのですが、いかがでしょうか。

質疑応答

発言者E ありがとうございました。まとめの3行目の「書き手のニーズや熟達度に合わせてタスクの難易度調整をし」と書いてあります。例えば日吉の経済学部の英語の教員だと1、2年生を相手にタームペーパーを書かせるんですけれども、個々人の教員がテーマに沿ってセミナーを出すのでいろいろなテーマなんですけれども、例えば「戦後」とか何となく緩やかに決まっているんですね。

それで、あまりとにかくウェブからコピペはしないとかそういう倫理的なことをがが言っていて、決まり文句的なものもいくつかありますよと言いながら、いろいろな動詞が使えますねと言うんですけれども、この「AWSuM」のような組織立ってこのセクションにはこう

いう表現というような指導をしてこなかったんで、すごく今日はびっくりしたというか効果的だなと思って見ていたんですけれども。

あ、そういえばさっきの3点目は、ちょっと1、2年生で英語はそんなに必ずしも得意じゃなくて、なかなか苦労していて、「戦後ですか」みたいな学生には「AWSuM」は向いているのか、あるいは「AWSuM」を使うときにどういうレベルの学生さん向けですみたいなところを最初に選んで設定をして、学生にレポートリーを制限したりやさしめのチョイスを与えるということはできますか。

大野 「AWSuM」自体はそのレベルの設定の機能はないんですけれども、あくまでも一般的に著名なというか、インパクトファクターがある程度高い論文雑誌の中で投稿されているものの、データベースの中に入っている表現を示唆していますので。「AWSuM」自体のレベル設定はないけれども、逆に言えばある意味オーセンティックな英語表現に触れるという目的で、かつ自分の例えば理解できるものを学生さんは取り入れていくと思いますので、自分の知らないポキャブラリーをそこで増やしていくというような使い方になるのかなとは思っています。

ツール自体は無料ですし、どうでしょうね、今の学生さんは機械には強いじゃないかと私はちょっと思うところはありますけれども、可能であれば少し授業の中でも使い方を一緒にちょっとご説明いただくなり例を見せたりしていただけると、より少レテクノロジーは苦手だなと思っている学習者でも使える機能はいくつかあるの

かなとは思いますが。

そのタームペーパーというのは論文のような構成で書かれるんですか。

発言者E そうですね。一応イントロ、コンクルージョンがきて、ボディーは3つとか、タイムパラグラフ・エッセーみたいなことをやるんですけども。

大野 ああ。そうでしたら、今回は学術論文にはなってしまうんですけども、イントロダクションとコンクルージョンのセクションを選んでいただければ、ある程度そこで対応される表現なんかは出ていきますね。

発言者D 私は専門がフランス文学なのですが、フランス語でもこうしたソフトがあれば自分自身試してみたいなと思いました。それで、ネイティヴ・スピーカーからの評価というものはあるのでしょうか。また、このソフトを使った場合と、使わなかった場合で、論文の完成度に違いが出るのかなどの調査結果はあるのでしょうか？

大野 なるほど。学生さんに書いてもらったとさっきお話をさせていただいたんですが、実は文章自体の分析がまだ終わっていませんので、もしかしたらどうでしょうね。評価は「AWSuM」を使ったかどうかというところで分かれるかどうか、興味深い視点かなとは思いますが。

発言者D ええ、ひじょうに気になりました。

大野 これでいくとファースト・ドラフトとファイナル・ドラフトを比較するということはできるので、そのあたりで例えばどの表現を変えたのかとか、その変化を見ることはできますね。

発言者D それと、このソフトはより合理的、エコノミーにより論文を書くためのソフトであるわけですが、イメージとして、単語を入れれば文章がどんどんできてしまうのであれば、教育的な観点からして、英語力の向上にとっていいことなのかどうかということを率直な疑問として持ったのですが。

大野 そのあたりは、やはり指導者の力量にかかってくるのかなと思います。つまり「AWSuM」、この機械ありきで、エッセーを書くぞとか論文を書くぞというのではだめなわけですよね。あくまでも補助ツール、支援ツールというような位置付けになっていますので、使うタイミングといいますか、最初から使うのではなくて、ある程度自分で書きながら分からないときに使うというような使い方にはなってくるのかなと思います。

確かに単語を入力すればどんどん出てきますよね。ですがレポートであっても論文であってもアイデア自体は書き手そのものから出てくるものだと思いますので、あくまで「AWSuM」でできるのは一般的な語連鎖といわれる単語のフレーズでしかないわけなので、誰かの特定のアイデアに寄与するわけではそんなにならないのかなという側面もあるので、ちょっと本当に指導の仕方、使い方のバランスが難しいところではあるんですけども。

発言者A 似たような意味を持つ語連鎖があるときに、どっちを取るかという判断をどのようにしたらいいかというのは、やっぱり相当それまでにインプットがあって、こういうコンテキストだったらこういうところでうまく使われているなというような、そもそも感覚がないと選択ができないですね。

大野 そうですね。あとは、そのコンコーダンス機能なんかを見ながら、どっちの方が頻繁に使われるかとか自分の使いたい文脈に近いものを選ぶとか、そういったところまで支援というか指導できるとより書き手としても力が付くのかなと思います。

なので、「AWSuM」を与えてそれで終わりというのではなくて、ぜひこの中に付いている機能を生かした指導が求められるというところで、私も今は模索中です。

発言者A たぶんインプット量が増えて語感が増えて、ある程度あるコンテキストにおける表現の良しあしの感覚までが育ってきた時点でうまくこういうのを投入して、自分だったらこの「AWSuM」がなくてもどう書けるかな、だけど「AWSuM」だったらこういうようなこともあり得るんだ。あ、こっちの方が僕の気持ちというか

考えにびったりするなというような選択ができて、それによってアクティブな行為と受容行為が一体になって、その学生の言語感覚みたいなのが上がっていくといいなとは思いますがね。

大野 そうですね。まさにその「AWSuM」自体もインプットはたくさんありますけれども、実際はアウトプットの活動のためのインプットでもありますので、そのあたりの循環といいますか、連携といいますか、そのあたりの使い方が今後の課題にはなってきますね。

発言者A 私なんかはドイツ語で書いているときって、よくふっとこれはどれぐらい使われているのかなとか思って、「Google」で取りあえず頻度検索だけをしてみてということをよくやるけど、それはある程度こちら側にその判断の力があるからそれが可能になるのかなとは思いますがね。Aを選ぶかBを選ぶかといったときにBを選ぶというときの背中を押してくれる、材料が欲しくてそういうことはよくやりますけれども。

大野 でも、その「Google」検索も学生さんは知らなかったりするわけなんですよ。だから、いろいろなツールがあるけれども使い方を指導するため。

発言者A だから、「AWSuM」もすごく有効なツールになるだろうというのは、お話を伺っていてとても思いました。あとは、どういうふうに使わせるかとか、どう体験させ、どう英語としての、さっきから同じことを言っているかもしれませんが、さっきはアウェアネスという話も出ましたけれども、自分自身が英語の表現に対する敏感さみたいなものを養うという学習者の意識がなかったら、やっぱりこういうツールは生きないだろうなとは思いますがね。

発言者D やや文脈が違うかもしれませんが、紙の辞書と電子辞書の違いのようなものでしょうか。やはり電子辞書はある程度その外国語の語彙が頭に入っている人が使うのが効率がいいですよ。ですので初学者にはなるべく紙の辞書を勧めます。このソフトも、ある程度の論

文作成能力がある人がサポート的に使うと有効なのかなと感じました。せっかくいらしているの、F君、なにかありませんか？

大野 これから論文を書くんですか。

発言者F はい、そうですね。外国語教育研究センターの主催の「アカデミック・ライティング」というコンテストがありまして、ちょっと英語で参加してみなさいということに。

発言者D ぜひ「AWSuM」を使ってみてください(笑)。

発言者F そうですね。

大野 「AWSuM」はちょっと文学の分野にピンポイントではまだ対応できてないですけども、例えばイントロダクションとかそのセクションごとに使える表現なんかも、もしかしたらあるかもしれませんね。

発言者F はい。

発言者A 外国語教育研究センターでやっているコンテストは分野を限らないです。どの分野でも結構あります。

司会 まだまだ議論は尽きませんが、時間になりましたのでいったん閉会にしたいと思います。大野先生、本日はたいへん有益なご講演をありがとうございました。

大野 どうもありがとうございました。(拍手)

慶應義塾大学教養研究センター主催
「学びの連携」プロジェクト公開セミナー

効果的な論文指導を目指して
——日本語論文編／英語論文編——

2018年3月31日発行
編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター
代表者 小菅隼人

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1
TEL 045-566-1151 (代表)
Email lib-arts@adst.keio.ac.jp
<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

©2018 Keio Research Center for the Liberal Arts
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。

ISSN 1880-3628
ISBN 978-4-903248-55-4

